
MONSTER HUNTER第三章～孤高の射手、峡谷を穿つ～

後藤正人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MONSTER HUNTER第三章「孤高の射手、峡谷を穿つ」

【Nコード】

N4942N

【作者名】

後藤正人

【あらすじ】

そこは嵐の棲む場所でした。そこは龍の眠る場所でした。なくした思いを拾いに、私たちは峡谷に踏み入れます。そこで待っていたものは、最強の敵との遭遇と、世界の裏側に潜む悪夢との遭遇でした。そして、私たちは知りました。私たちが確かと信じていた世界が、あまりに強大な脅威の上に横たえられていたことを。

第一話「孤高の射手と黄昏の舞雷竜」（前書き）

第三章、いよいよ？ 始まります。今回はこれまでの反省を踏まえ、戦闘シーンをコンスタントに入れていこうかと。

なお、私は原作なんて参考程度をその胸に、今日もニコニコ設定捏造に励んでいます。モンスターハンターの世界観の根底にあるものは大切にしながらも、独自の世界観になってしまいますが、その点ご了承ください。

第一話「孤高の射手と黄昏の舞雷竜」

ドリームランド峡谷にさしかかる山岳地帯に位置する人口五〇人足らずの村である。主な地場産業は峡谷という特殊な環境から採取される鉱山資源に動植物の採取。むき出しの岩が転がる斜面に人家が点在する形で村が形成されている。

峡谷からの風が家と岩の間を吹き抜ける。風は斜面を下りながら、夕暮れ時の空気の冷たさをその身を含む。背の低い草花を撫でてはその独特の香りを村へと吹き付けていた。

その香りの中に、雨の湿った匂いと塗れた土の臭いが混ざり込む。そして、血の微香がかすかに残る。

レムリア大陸西岸に位置するドリームランド峡谷の入り口に位置するこの村の名は、ガールン村と人は呼んでいた。

倒壊した家屋。木材と石を組み合わせて作られた家屋は天井と床の区別なく崩れ落ち、その建築素材をなだらかな斜面にそって散らかしている。壊れた人家を見渡すに適した場所に斜面の一角が隆起して人一人が立つにほどよいくらいの台ができあがっていた。

ここに立つのは一人の男。

その男はテングロンハットに派手なベスト。その色は赤で統一され、男の全身を赤一色に染めていた。この姿は誰もが知っている。

ギルドナイト。ハンターズ・ギルドの構成員にして治安と秩序の担い手である。その役割は多岐に渡り、事故の調査から事件の解決

あるいは隣人とのトラブルの仲裁にまでかり出されることもある。

今回は最初に挙げた事故調査のためにこのギルドナイトはある人を待っていた。

決して長く待つ必要はないだろう。何故なら、視界がほどよく開けたこの場所では近づく人の姿をあっさりと見つけることができるため、目的の人物の姿をすでに見つけているからである。

村の民家をつなぐ細い道の上を一行に歩くのは若い女性が二人。

先頭の女性は、どこか散歩にでも出かけるような出で立ちをしていた。小さなシルクハットに燕尾服を思わせるような白の衣装。ただし、それは甲殻のようで甲殻とは違う、独特の光沢を有する硬質な鎧である。アクラリ。沼地に時折確認されるアクラ・ジェビアなる甲殻種から作り出されるれっきとした防具である。その背にはアクラ・ジェビアの甲殻を鉱物、結晶で固めた大剣が背負われていた。

そしてもう一人はやはり一見するとモンスターの相手をしているようには見えない姿をしている。黒いベレー帽に黒いベスト、そして黒いフレア・スカート。ヒーラーと呼ばれる装備で、元々は看護士の服装をモデルに考案されたものとの話も聞いている。もつとも、背には金属の板を張り合わせた無骨な弓が背負われ、とてもではないが癒し手には見えない。

二人がハンターであることに間違いはなかった。

「こんにちは」

近くに来るなり、声をかけてきたのはアクラリを身につけた女性

の方である。笑顔が明るく、陽気とまではいかないものの、人付き合いの良さを感じさせる女性である。

「連絡は受けています。私はガールン村駐在のギルドナイトでボレアースと申します」

「自分はソフィア。あちらはスノードロップです。ミスカトニック王国から派遣されてきました」

簡単な挨拶と握手を交わす。ただ、ヒーラーUを装備した女性の方は無愛想な表情のまま、倒壊した家を眺めるばかりである。ボレアースのことを見ようともしていない。

「モンスターが村を襲うなんて。村の違法建築？ それとも私たちの怠慢？」

憲法の規定により、大型種が生息する場所から人の足で二日未満の場所に集落や村を設営することは禁じられている。そのことを指摘されているのだとわかつてはいても、頭ごなしの非難に反感を覚えないこともない。

「どちらでもないさ。それに村は襲われたわけじゃない」

しかし、不満を不満と、不服を不服とあからさまに表現していいわけでもない。ボレアースは見渡すふりをして顎で村を示した。村は人影が疎らではあるが、壊れた家など目の前の一軒しかない。

「民家が一つに犠牲者も一人。これは幸いに、とでも言うのかな」

ソフィアと名乗った女性は残念そうに顔をしかめた。

「被害者は女性だ。家の中にいたところを不幸に見舞われた」

すでに葬儀は終わっている。事故発生からすでに丸五日が立っていた。もはやここに遺体はなく、壊れた家と、そして、あの時からぐずついた天候が尾を引いているだけである。そして、まもなく家の解体も始められることだろう。

黒い雲が空には点在し、いつまた雨を降らすとも限らない。風は、どこか嫌な冷たさを含んでいた。

ボレアースにとっても被害にあった女性とは顔見知りで、このような事故を担当することはいいいものではない。そんな感慨にふける間もなく、スノードロップと呼ばれた女性は無遠慮であった。

「襲われたわけじゃないというのは？」

人家の近くにまで出向き、熱心に観察している。そのことはスノードロップがボレアースのことを一切見ていないことを意味する。

「着地した場所がたまたま村だったというのが正解だということだ。原因は不明。だが、本当に襲われたならこの程度ではすまなかった」

「目撃者は？」

矢継ぎ早。さすがは弓使いだけはある。ともかく、これは仕事だと割り切ることにした。

「残念ながら少ない。ちょうど通り雨があって村人は家に入っていた人が多かったようだ。だが、少ない情報からなら、モンスターは

ベルキュロスだとの証言を得ている」

舞雷竜ベルキュロス。近年峡谷に生息が確認された飛竜種である。翼についた長い鉤爪が鞭のようにしなやかで、装飾のような優雅ささえある。とても流麗な姿をしている。その特徴は全身に備えられた発電器官を利用しての電気を用いた攻撃で、舞雷竜の名はその姿と性質に由来する。

少なくとも、他の飛竜種と見間違えるような種ではない。

本来ならベルキュロスが人里にまでやってきた理由を調べて解決策を講じる。それで事件解決なのだが、わざわざそんなことでミスカトニツク王国が特務騎士を送ってきたりなどしないだろう。

「我々ギルドナイトは言わば人の間を仲介する業務を担っている。君たちのように対モンスター戦に手慣れている訳ではない」

現在、ハンターズ・ギルドからのお達しで峡谷の一部、特に深い部分への立ち入りが禁止されている。その理由はボレアースのような末端の者にまで知らされてはいないが、何かが起きていることに間違いはない。

ソフィアの方はスノードロップとは異なり、人の目を見て話すという礼儀を心得ていた。

「もったいぶった言い方はなしにしよう」

こちらのお遊びにつきあってくれる気もあるらしく、その顔はどこか楽しげでさえある。

「峡谷にハンターが二人入った。この事故の被害者の婚約者と妹だ。気持ちはわからなくもないが、仇を追っているらしい。婚約者の方はジェイナス。妹はシギユンが名前だ」

ギルドのクエストでもなしに人里を離れることは二つの意味で危険極まりない。

「何とも健気な話ですね。しかし状況によっては賞賛に値するかどうかが意見が割れることになりそうでもありますけど」

スノードロップは首だけで振り向いた。ようやく振り向いたかと思うと、せいぜい顔の右半分を向けただけで、見えた瞳は人を寄せ付けない色をしている。まだ出会って間もないとは言え、反感というものを抱かずにはいられない。

「わかりました。二人のことは心に留めておきます」

ソフィアがいてくれるのは救いである。王国はこのようなことも考えてこの二人を組ませているのかもしれない。だとすれば、世の中というものはよくできていると言える。

ギルドナイトのボレアースは様々なことを教えてくれた。峡谷に入った二人のハンターのことから、現在ガールン村の周囲で起きている異変など。これから調査に向かうソフィアにとってありがたいことばかりである。

村を離れてすでに半日。峡谷にさしかかると途端に空気が乾燥し、高所にあることから草木の少ないならかな地形が続いていた。そ

れはとても歩きやすい。ただ、空には雲が多く、近い内に嵐が来るような気配がある。別に峡谷はまったく水のない場所ではない。それどころか、小規模の湖が各所に点在し、生物層も豊かな場所なのだそう。

嵐が来ていた。それだけのことだ。

いくら異変の調査に向いているとはいえ、何でもかんでも異変と結びつけてしまうのはおかしい。

「スノードロップ、今回の事件をどう思う？」

すぐ隣を歩く同僚は前を向いたまま、歩みを止めないまま答えた。

「ベルキュロスが峡谷から出る理由がわかりません。ただ、この近辺は村も集落も少ない。もしかすると報告に上げられていない事件がいくつも隠れているかもしれません」

「姫様は今回ばかりは本気だね。僕たちを三人も投入するなんて。この事件も何か関係あるのかな？」

すでにもう一人は峡谷に潜入している。もともと、この話はスノードロップのお気に召さなかったらしい。三人目のことではなくて、ミスカトニック王国第二王女セントポーリアのことである。

「あの女の話はしないでください」

「それなら、君のお姉さんのこともタブーかい？」

返事はない。

スノードロップには姉がいた。優れたハンターで冷静沈着にして大胆不敵。そして、とても面倒見のよい人で、慕う者も多かった。得意のヘビィボウガンで強大なモンスターを一人で倒したことなど、今でも語りぐさである。

しかし、姫様の命令に忠実であるあまり、あの人は変わってしまった。まだ死んでなんていない。それでも、スノードロップは大切な人を失ってしまったといつも嘆いている。

それは今も同じこと。

「峡谷に入ったハンターは二人とも上位ハンターらしいよ。男性の方は雷落としての異名で呼ばれるくらいベルキュロスに慣れた人だつてさ」

「皮肉ですね。ベルキュロスの命を奪い続けた男がベルキュロスに恋人の命を奪われるなんて」

そう言うスノードロップも、姉を奪った相手に仕え続けている。

「亡くした恋人のために命をかける。ドラマティックではありませんせんか。でも、現実はおとぎ話のようにはいかないのが常でしょう」

優秀な射手はたとえ義理の姉妹の契りを交わしたソフィアにとって決して視線を合わせようとはしなかった。

雷が舞う。それ以外に表現のしようがない。

舞雷竜ベルキュロスは大気を打ち鳴らして叫び声を上げた。

全体として平たい、そんな印象を与える飛竜である。普段から浮遊していることが多く、その足は他の飛竜と比べると短く小さい。それに反して翼は広く雄大。頭頂部の角は鋭く伸び、細かい歯が並んだ細長い顔をより鋭利な印象にまとめている。左右に鱗を連ねたような副尾が一对。尻尾も細く長く、峡谷を満たす風を全身で受け止めて低空を滑空する。

ベルキュロスは片翼を持ち上げた。翼の鍵爪から真後ろへと長く伸びた鉤爪をしならせた。緑がかった黒の甲殻に、その隙間を埋める黄色い体色。その体色が輝いたと思うと、一瞬の閃光とともに鞭が峡谷特有の平たい地面を薙ぎ払う。

何かが弾けるような音。光が大地をのたうち回った。

全身の発電器官から発せられる巨大な電圧と電流。それは大気さえ裂いて中空に放たれる。直撃すればよくても筋肉がやられ、悪ければ一撃で意識を持っていかれてしまう。

強力無比な電撃を踊らせるように扱うことからベルキュロスは舞雷竜と恐れられる。

しかし、そんな飛竜とて、人間は貪欲に狩りの対象と見なしてきた。

大地を蹴る音と力強いかけ声。赤い甲殻で全身を覆っているような装備をした男がその走る勢いさえ利用して背から大剣を一気に振り降ろす。

白い毛が牙のように並ぶ鋸状の刃を包んだ大剣である。刃には水滴が浮かび、それが冷たく、冷やされていることがわかる。

大剣はベルキュロスの額に叩きつけられる。冷やされた刃がベルキュロスの甲殻を浸食し、叩きつけた衝撃は角を根本から砕いた。悲鳴を上げてベルキュロスが仰け反る。体勢を大きく崩したことで浮力が拡散し、その足が地表すれすれにまで降りていた。

後ろからは別のハンターがその隙を逃さない。全身を白い皮でこしらえた防具で守るそのハンターの手には白い大鎌。これもまた、刃に水滴を浮かべている。

副尾はすでに甲殻が鱗状にはがれ、赤い肉質が痛々しくも露出している。大鎌はそこを容赦なく打ちつけた。流れ出るわずかな血。鎌の姿をした太刀は再度振り降るされたかと思うと、流れる動作で突きが繰り出される。刃が副尾にそう形でさらに組織を破壊する。

うっとおしい相手が後ろにいる。ベルキュロスが振り向こうと体を大きく旋回させようとする。そこへ、赤いハンターはさらに大剣を叩き降ろした。

ベルキュロスの翼膜はすでに擦り切れた布のように綻びた姿をさらしていた。白い大剣の切っ先が表面を撫でるように削り取っている。

この一撃が、翼に仕込まれていた発電器官を狂わせた。絶縁性に優れるベルキュロスの甲殻を通り抜けてまで、電気が体表を這う。ベルキュロスは他の傷ついた部位からも漏電が目に見えて確認される。

赤いハンターは叫んだ。

「離れるんだ！ 放電する！」

声と同時に離れるハンター二人。取り残されたベルキュロスは光り、放電が収まったかのような静けさを見せると、体内から膨れ上がった電流が一拳に膨れ上がる。それは轟音と閃光をまき散らし、ベルキュロスを内と外から焼き尽くす。

音がやみ光が収まると、そこには体中から白い煙を立ち上らせながらひれ伏す舞雷竜の姿があった。

ベルキュロスの電気は強力な武器であるとともに弱点にもなる。強力すぎるが故に、制御を離れば自己さえも傷つけてしまうからだ。そして、空を飛ぶための軽い体は脆く、発電器官は傷つきやすい。

ジェイナスは動かなくなつたベルキュロスを見下ろしていた。大剣はすでに背に戻してある。

身につける赤い防具は紅溶岩竜と呼ばれるヴォルガノス亜種の甲殻を張り合わせたラヴァーである。火山地帯、それもマグマの海を泳ぐという驚異の魚竜種ヴォルガノスの甲殻は電気の発する熱にも強く、ベルキュロスを相手にすることに適している。また、大剣は響狼の牙と毛を使用したもので、冷えた刃は冷却に弱いベルキュロスの甲殻に大変有効である。

雷を落とす時まで呼ばれたジェイナスの戦い方には、無駄というものがない。

しかし、戦いさえ終わってしまえば、ラヴァUの仮面を思わせる兜が外され覗く顔は、どこにでもいそうな優しげな青年の表情をしている。その目はベルキュロスを挟んで立つ白いハンターへと向けられていた。

「すまない。君をこんなことに付き合わせてしまつて」

白い。それはベルキュロスと同様電気を扱う飛竜フルフルの弾力性に富んだ皮を用いた防具を色である。とても鎧とは思えない外見と印象を持ち合わせ、どこかわいらしくさえある。フードの下から見えるのはうら若い少女の顔である。いかにも物静かと言った様子で、大きな瞳が特徴的である。

「私にとつても肉親の仇ですから。そんなに気にしないで下さい」

「シギユンは優しいな。そう言ってもらえると助かるよ」

ジェイナスは微笑む。もしかしたら義妹になっていたかもしれない少女は、頬を赤らめていたが、それは戦いの疲れが出たからであろうと、ジェイナスは判断した。

そう、戦いは終わった。しかし、何も達成されてはいない。

「でも、こいつじゃないんだろ。ヘスティアを傷つけた奴は」

動かなくなつたベルキュロスの体を睨みつけて。その眼差しは恋人を思う優しい男ではなく、仲間を気遣う好青年のものでもない。

冷酷な復讐者のそれであつた。

第一話「孤高の射手と黄昏の舞雷竜」(後書き)

投稿は一週間に一度くらいを目標としています。だいたい、八話程度の短編の予定です。

第二話「孤高の射手と邪の思い」

狩りに行くということ。それは散歩のような気軽さで行けるものではない。村のすぐ側に大きなモンスターがいるはずなんてない。すると、片道数日のところにまで出向かなければならない。

一度の狩りにかかる時間は五日から、長ければ一〇日かかる。場合によっては一月がかりで狩ることもあるらしい。

ジェイナスが狩りから戻ってきたのはちょうど七日目の朝のことだった。長くもない。短くもない。

長ければ、ハンターなんて職業を選んだことを悔やむこともできた。自分を責めることもできた。ただ、七日は長さとして適度で、ハンターなのだから仕方がないという思いが芽生えてしまう。

短ければ、最前を尽くしたのだと自分を慰めることもできたかもしれない。ただ、七日ではもっと早く帰ってくることができたのではないかと後悔と自責の念ばかりが募る。

雨が冷たい。これまでそう感じたことは幾度もあった。ただ、耳障りに感じたことはなかった。

砕けた壁をかき鳴らす。散乱する陶器の破片を叩く。ダンウィッチ村の斜面を滑り落ちる水の音。どれも、耳障りだった。

雨は倒壊した恋人との思い出さえ、容赦なく濡らす。

ジェイナスと同じく雨に濡れる村人たち。立ち尽くすジェイナス

と潰された家を交互に眺めて、やがてジェイナスへとその眼差しを集めた。

「ヘステイアのことは残念だった。運が悪かったとしか言いようがない」

声をかけてくれたのは、この村に駐在しているギルドナイトのボレアース。村に戻って、いつもなら真っ先に出迎えてくれるヘステイアの代わりに沈痛な面もちで事故を伝えてくれたのも彼だった。

「僕がいれば……」

「事故は誰にも予測のできないものだから事故なんだ」

「ヘステイアのことは任せて欲しい。せめてなんだが、立派な供養にしたい」

「ヘステイアは幸せだったと思うよ」

「完璧な人間なんていないさ」

「ジェイナスはハンターとしてできることをみんなやってと思うよ。だから、あまり気負わないで」

村の人たちはみんないい人ばかりで、ジェイナスを気遣ってくれる。それが辛かった。

してあげられることはみんなした。それでもヘステイアは死んでしまった。それを認めてしまうことは、ヘステイアの死そのものがまるで運命だったと認めてしまうようで、たまらず嫌だった。

同時に、理屈としてはジェイナスにできることなんてなかったことも理解している。それを、恋人を死なせてしまったことへの免罪符に利用しようとする自分がいることもわかる。

亡き恋人のために本当にしてあげられることはないのだろうか。

このまま、仕方がない。やむを得ない。そんな言葉を並べて、自分に言い訳して生きていくことなんて許されるのだろうか。

ジェイナスは、仇を追うと決めた。剣を磨き、道具を担ぎ、峡谷へと入る。それが、愛する人へのせめてもの手向けになると信じて

峡谷はその海拔の高さから比較的植物が育ちにくい。そのため、主な植物は霸王樹ばかりで、決して緑に恵まれたとは言えない赤茶けた大地と、起伏の激しい地形が続く。

それでも、かつてはここを流れる川もあつたこともあるらしく、水資源は豊かな方である。少し探せば、窪地に貯まった大きな水たまりを探することができる。それは池と呼ぶよりも即席の湖のように大きなものが見つかることもあつた。

本当は、水辺にテントを張るべきではない。急な増水に対応できないほか、付近のありとあらゆる生物が水辺を目指すからである。水辺にいるということは、必然的にそんなあらゆる生物との遭遇確率を増やしてしまうことになる。

それでもジェイナスが水辺を宿営地に選んだのは、便利であるこ

と、それとどこか、自棄になっているのかもしれないと自分なりに分析していた。

一応付近を見回ってはみたが、危険な生物がない保障はない。ギルドの管轄から離れた狩りをするということはそういうことだ。

その時はその時。

ジェイナスは池の縁に腰掛けた。普段身につけているラヴァーは高熱には強いが、湿気に弱い素材が使われているため、今は脱いでその辺りに転がしてある。足を池に差し入れると、水が冷たい。それでも、あの日の雨ほど、冷たくは感じられない。

聞こえてきた足音。モンスターのように重々しいものではなくて、少女の軽い音。首だけで振り向くと、フルフルの白い皮を加工した服を着ているシギユンの姿。ハンターをしているなんて思えないくらいかわいらしい顔は、姉であるヘステアをどうしても彷彿とさせる。

つい、目をそらして顔を前へと向けてしまった。

「隣に、すわってもいいですか？」

悲しみと共有してくれようとする心優しい少女の言葉にも、ジェイナスは振り向くことさえしなかった。

「ごめん。今は一人でいたいんだ。何だか、何もしてないとヘステアのことばかり思い出してしまうってね」

遠ざかる足音。テントに入るような音がした。それくらい、ここ

は静かで、月明かりだけが辛うじて視界を与えてくれる。

ヘスティアが死んだなんて、悪い冗談か、夢のようにさえ思える。だって、まだ遺体を見てなんていない。村の人たちが気を使って、見せてくれなかった。

以前、行方不明のハンターの捜索に参加したことがあった。残念ながらそのハンターは亡くなっていた。死後、その遺体はモンスターに食い荒らされて酷い有様だった。とても遺族には見せられない。形見の品を持ち帰って、遺体はその場に埋める他なかった。

本当に、じっとしていると嫌なことばかり思い浮かぶ。

側に捨てられるように置かれた大剣に手を伸ばす。

牙狼大剣「月読」。牙獣種オルガロンの素材を用いた大剣である。この武器の特徴は刀身を包むように植えられたオルガロンの毛にある。に飾りではない。この並べられた体毛が、この大剣に冷気を与えてくれる。

柄を外す。すると、刃の中は空洞であり、水がこぼれ落ちた。この水が、刃を冷やすのである。オルガロンの毛には人の手では作り出すことができないほど細かい溝が根本から先端に向かって掘られているらしい。まず毛の溝が毛細管現象で刃の中の水を吸い上げる。すると、溝を通して外気にさらされた水は気化して、気化熱として付近の熱を奪う。すると水が冷やされる。冷えた水が刃を触ると痛くなるくらいに冷やすのである。毛の一本一本なら大したことがなくても、刃を覆うほどびっしりと植えられた体毛すべてが水を冷やすため、全体として膨大な気化熱を吸収する。

もつとも、冷やしすぎては刃を痛める。水が入っていないければ刃は冷えない。適度に水を抜き、適度に補充する必要があった。今は前者。戦いがない時は、水を抜いておくのである。

流れ出た水が池と混ざりあう。柄を戻すと、これだけで作業は終わってしまった。後はまた明日にでも水を補充すればいい。

また、大剣を地面に置く。手を止めると、どうしてもヘスティアのことが思い出される。

「ヘスティア、お葬式に参加してあげられなかったことは悪いとは思っているよ。でも、まだ君が死んだなんてことを受け入れることができないんだ」

ボレアースが冗談だよって言うてくれたなら、一度思い切りぶん殴って、それから笑って許してあげられるのに。もつとも、仕事にまじめなああのギルドナイトがそんな悪質な悪戯するはずもない。

ヘスティアは死んだ。

「そう言えば、君は僕がハンターをしていることに反対だったよね。泣いて怒ったこともあったね」

それなのに、妹のシギユンはハンターになって、姉を困惑させていた。どうしてなのか、ヘスティアはわからないと言って、シギユンは教えてくれなかった。

「でも、君は僕を許してくれた。人のために働いてるんだって認めてくれた」

ヘスティアが亡くなった時も、ジェイナスは沼地に人を襲ったモンスターを討伐に出向いていた。キノコを採取に向かった村人が戻ってこなかった。ギルドが警報を出すべきか検討している間に、馬車が襲われ、旅をしていた一家が皆喰われた。

ギルドは緊急警報を発令。沼地への立ち入りを禁じるとともに、ハンターを派遣した。ジェイナスもその内の一人であった。

池の水面に映る月のように歪んだ月が昇る沼地で、ジェイナスは人喰いを犯したモンスターと対峙した。

赤い月が見下ろしている。昼の間に流された血を目にしてしまったからだろうか。泣きはらしたような月の赤。セラエノ湿地に毒と夜とが帳を下ろす。

毒気を含んだ大気を震わせて、響かせて。響狼と呼ばれる牙獣の咆哮は悲しく響いた。

朽ちた木が幹だけになって点在する。草花なんてその姿を見せない。剥き出しの岩のような地面にとろどろ水たまりができて、それ以上に黒ずんだ紫色をした毒沼が大地に染み出していた。

植物など生えていられない。ただ、ごく一部の菌類が毒素さえ取り込んでキノコを形作る。

そんな排他的な毒の沼の中に、1頭の牙獣が横たわっていた。白い体毛のオルガロン。雌の個体で、ノノ・オルガロンと呼ばれるものである。四足で地面を蹴る細長い体に、鋭い牙。頭から尻尾にか

けて並ぶたてがみはナイフのような鋭さをさらしている。

そして何より、響狼はコミュニケーションをとる種族であると知られている。大きな咆哮を洞窟の中に、そう、響かせて遠方の同種と連絡をとるのだそうだ。

そして、他種には見られない大きな特徴は、一度番になると生涯にわたって相手を変えることなく添い遂げることにある。

命を亡くしたノノ・オルガロン。毒沼に足を浸らせていることもかまわず咆哮を上げているのは、別の個体。こちらは、黒い体毛が特徴である。

カム・オルガロン。間違いなく、このノノ・オルガロンの夫であった。

夜空に響く声は、鎮魂か、悲しみ。亡き妻の死を悼んでいた。

ジェイナスはノノ・オルガロンの命を奪った大剣を背負ったまま、柄に手をかけた。カム・オルガロンの憎しみに血走った眼が向けられる。

「ごめんな。君にとって、とても大切な人だったんだろうけど。でも、君たちは人を襲った。人を襲ったモンスターは駆除しなきゃならないんだ」

人は弱い。鍛えられたハンターでさえ命を落とすこともある。一般の人がモンスターに襲われたらひとたまりもない。それでもモンスターは人を襲わない。多くの場合、人のことを恐れているか、あるいは得体の知れない獲物に手を出すことを控えるから。

ところが、人を襲って、その肉の味をしめたモンスターは違う。人を容易に狩ることができる存在だと知ってしまった。人を喰える存在だと学んでしまった。

だから、人を殺したモンスターが現れた時、ハンターズ・ギルドは全力でその討伐に当たる。

殺された村人や、喰い散らかされた家族の仇が討ちたい訳ではない。ただ、これ以上誰かが犠牲になることだけは防がなくてはならない。そんな使命感。

カム・オルガロンが毒沼から跳ね上がる。毒沼を吸ってすっかり紫色に変色した手足を見せつけるように飛びかかってきた。前転して、その下を通り抜ける。鋭い爪がほんの少し上を通り過ぎた。

牙獣種は飛竜種に比べるとしなやかな体を有している。それでも人間ほど小回りがきくわけではない。

すぐさま振り向き、カム・オルガロンの方へと駆け出す。腰を捻り、振り向こうとするその頭へと大剣を振り下ろす。まるで金属でも叩いたような鈍い音がして、たてがみの棘が欠ける。だが浅い。

カム・オルガロンがその口を開けて噛みつこうと跳び出す寸前に体を横へと転がして逃げる。背中の高さがせいぜい人の身長ほどと大きくはないオルガロンだが、噛み付きの迫力は飛竜種に勝るとも劣らない。

鋭い爪に牙。密着しているわけにはいかない。一度距離をあけようと走る。カム・オルガロンは追ってはこない。代わりに、唸り声

を上げた。

上体を強く仰け反らせて、腹の底から聞こえてくるような轟き。体を水平にするとともに開かれた口から風が放たれた。渦巻き、土砂を巻き上げては風が見える。

狙いが正確でなかったのか、放たれたブレスはジェイナスの脇を抜けて行った。直撃していないにも関わらず、ジェイナスは危うく吹き飛ばされそうになり、体を低くせざるをえない。それていった風の塊は人の胴体ほどもありそんな岩さえ吹き飛ばしてから掻き消えた。

「風のブレス……」

考えてみればあり得ない話ではない。洞窟に響きわたるほどの咆哮を放つ肺活量をもってすれば、溜めた空気を一度に放つことで武器にすることもできる。空気を防ぐことはできない。大剣を構え防いだところで、風は障害物の後ろに回り込むだけである。どうしてもここで流れを変えることはできない。

近づけば牙と爪。遠ざかれば風のブレス。それなら、答えは決まっている。

剣の届く間合いを目指して、ジェイナスは駆けだした。

「剥いてみてわかったよ。あのオルガロンは、歯がいびつに変形していた。爪もとてもじゃないけど狩りに適した形はしていなかった」

負った傷が原因だとかじゃなくて、元々そのような形をしていたらしい。

「きつと障害を抱えて生まれてしまったために、野生の世界では狩りができなくて人を襲い初めてしまったんだと思う」

人間相手にはよくとも、モンスターの分厚い皮膚を貫通できるような代物ではなかった。流れ着いた沼地で、人を偶然捕食した。それが習慣になってしまったのだろう。

生きるために喰らう。生きるために殺す。そこに善悪はなくて、ただ歴然たる事実が並ぶ。ジェイナスと二頭のオルガロンを分けたものは、ただ単にジェイナスの方が強かった、それだけのこと。

アイテム・ポーチも、その辺に転がしていただけで、幸い手に届く範囲にあった。中からとりだしたのは、オルガロンの牙で作った1対のネックレス。片方を、ヘスティアに贈るつもりだった。

「僕が彼らの牙を君に贈りたかったのは、死してなお、共にいたいと願った二人の姿を見たからなんだ」

カム・オルガロンは亡き妻に寄り添うように倒れ込み、そのまま事切れた。

「君となら、そんな絆が得られると思ってた」

ジェイナスは、今でも姉のことを忘れてなんていない。仮設テントの中からでも、その死を悼む青年の声は聞こえていた。

姉がそこまで思われていたことは妹として嬉しいことに決まっている。みんなも言っていた。君のお姉さんは幸せ者だと。

テントの中で体を丸めているしかできないシギユンとは違って、ヘスティアは理想的な女性であつたと思う。優しくて、暖かくて、ジェイナスが好きになるのは当たり前。

いつまでもジェイナスの心の中にも当然のこと。

「ヘスティア姉さん……」

止まない雨なんてない。同時に、永遠に続く晴れ渡る空もない。

何にせよ、時間が来たなら朝はやってくる。

朝日の中で、ジェイナスはラヴァUをすでに身につけていた。大剣にはすでに水の補充を終え、徐々に刀身が冷え始めている。

仮設テントの中から出てくるシギユンの姿を確認する。

「おはよう。よく眠れた？」

「いえ、あんまりです」

眠たげに瞼をこするシギユン。

「僕もだよ」

ただ、ハンターとして夜通し狩りを続けることもある。そう何日も続けては無理にしろ、短い時間でも休息をとるコツというものを、二人とも心得ている。

行動はすぐに起こすことができる。ジェイナスが仮設テントを置んでいる間、アイテムをまとめた袋を眺めるシギユンが困ったような顔をした。

「もう峡谷に入って一週間ですね。ベルキュロスを二頭も倒すとさすがにアイテムが心許なくなってきました」

ギルドの管轄によらない狩りというものは、様々な弊害が現れる。調査を組織だつて行えないため、情報の不足から、支給品などのサポートを受けられないことも大きい。

危険で、かつギルドを敵に回す行為。そんなことを続ける意味があるだろうか。意味なんて、考えることはやめよう。

「もう少し探してみたいんだ。あと一体付き合ってもらえないかな？」

「わかりました」

シギユンは、本当に気持ちよく笑ってくれる。こんなことに巻き込んでしまったことを、それで許されたような気持ちになってしまふ。

「ありがとう。それと、ベルキュロスがちょっと変わった姿をしていたというのは確かなのかい？」

「はい。私が見たベルキュロスは、灰色をしていました」

村への帰り道。飛び立つ飛竜の姿を思い浮かべているのか、シギユンは険しいハンターの顔をする。

シギユンとは大切な姉を失っているのである。

見上げると、切り立った岩肌が立ち並んでいる。この峡谷のどこかに、ヘステアの命を奪った飛竜がいる。

遠く響く雷鳴が、峡谷の乾いた大地に響きわたった。

第二話「孤高の射手と邪の思い」（後書き）

メインのモンスターではないため、オルガロンは短めです。

剛種クエストでもない限り、オルガロンはどちらか片方だけと戦うことになります。その際、討伐でクエストを終了すると番の片割れがどこからともなくやってきて、亡骸の傍で咆哮を上げます。

初めて見た時、なんとも印象的な場面だと感じられました。

ちなみに、牙や爪が云々のくだりは、アフリカで人を襲ったライオンが殺された際、その爪や牙の形が異常であったということが確認されているというエピソードを参考にしています。

他の作者さんの作品ではよくモンスターに人が殺されていますが、実際アフリカのような場所でも日常的に人が野生動物に襲われているわけではありません。社会が構築されているのになおモンスターによる襲撃があるのなら、それなりの理由があるはずだと考える私なりのお遊びです。

第三話「孤高の射手と災いの招来」

時に気まぐれな雲が霧となつてかかる峡谷の大地。まばらな植物と平たい台地。そそり立つ崖がその風景のすべてである。崖に囲まれた道を風が吹き抜ける。遠くでは雷がその喉を鳴らしている。

嵐が近い。

疎らな雨が降り注ぎ、吸水性に乏しい峡谷の土に染み込むことなくすでに小さな流れを作り出していた。大雨ともなれば崖の下を濁流となつて峡谷を縦断する。天氣が変わりやすく、それでいて環境が激変する。

ここは人が踏み入るには過酷な環境であり、事実、近年まで調査が行われることはなかった。それでも、人は峡谷を訪れる。少しずつ、わずかずつ、そして確実にその生息圏を広げていく。

謎が謎ではなくなり、未知が既知へと姿を変えていく。

それは一〇〇の箱を開けることと同じ。一〇〇の箱の中身がすべて空であることを証明するためには一〇〇個すべてを開けなければならぬ。たとえ九九の箱を開けたとしても、最後の一つに何が潜んでいるのかわからないのだから。

峡谷を吹き抜ける風を纏う翼膜は引き裂かれ、美しくさえあるその姿は見る影もない。舞雷竜ベルキュロスはその屍を冷たい雨に打たせるままにしていた。

体内の発電器官から放出された電流の火傷が各所に残されている。角はへし折れ、だらしく伸ばされた舌は堅い地面を舐めている。甲殻に所々残された細かな傷跡は人の手によるもの。

ただし、背中肉を大きくこそぎとる傷は、人の所行ではない。

ベルキュロスは喰われていた。

「殺したのは人間。でも、剥ぎ取った形跡はないし、それに、食べたのはきつと人間じゃない」

舞雷竜の体に手を置いて、傷口をつぶさに観察しているのは貴婦人。ただし、その背には巨大な水晶で二つの刃をつないだ大剣を背負い、また、衣服にも水晶が散りばめられている。灰晶蠍アクラ・ジェビアの素材を纏う女性が、峡谷に足を踏み入れる者がハンター以外の何者でもないことは明白であった。

ハンター、ソフィアが振り返ると、仲間がベルキュロスの翼を手に取り眺めていた。薄くしなやかな翼膜は人の手でも持ち上げることができるとは思えない。

黒い看護士のような姿に弓を背負う。スノードロップは翼の傷を眺めたまま、ソフィアの方を見ようとはしない。

「当たり前です。それにしても、一体どんなモンスターが……」

ベルキュロスを食べる人間がいないように、ベルキュロスこそがこの峡谷の食物連鎖の頂点に立つ種であると考えられている。もちろん、屍となれば喰い荒らされることもあるだろうが、死体に残つ

た歯形は大きなものである。

「峡谷の生態系はまだわからないところが多い。あまりに険しい地形だからね。村みたいな中継地点ができたことでようやく入れるようになったような場所だから」

「生息が確認されているゲネポスのような小型種ではありませんね、この喰い荒らし方は」

スノードロップも同じことを考えているらしい。

傷口には変色した跡が見られた。冷気に弱いベルキュロスの甲殻が、急激に冷やされた証である。村のギルドナイト、ボレアースに聞かされた敵討ちに峡谷に入った男性の得物と特徴が一致する。

これが亡くなった女性の恋人と、その妹の手によるものであることは間違いないようだ。死体の状態から、約一日といったところだろう。モンスターを避けて人間の痕跡を辿っている者とモンスターを探し戦いながら歩いているものとは自ずと速度が違う。

徐々に追いつきつつあるようだ。もつとも、わかっているのは昨日までここに人間がいたということだけ。

「同じ縄張りに大型種が二種類以上いるのも不自然。もちろん、同種だったり、完全に棲み分けができていたら別だけど。さて、スノードロップはこれをどう考える？」

もうこれ以上死体の検分は意味がない。スノードロップの方を見ると、弓使いのハンターは一瞬こちらを見ただけですぐに歩きだそうとする。

「結論は一つです。情報不足により、わかりません」

「妥当なところだね。結論を急いでも、間違っているとは思えない。ただ、少し面倒なことが起き始めているのもたしからしい。少し急いだ方がいいかもしれないね」

そう言って、ソフィアもまた歩き出す。その行く先には、嵐が不気味に唸りをあげていた。

「雨が降ってきましたね。あの日も、こんな嵐の前触れみたいな日でした」

その小さな手のひらに雨粒を受け止めるのはフルフル装備に身を包むシギユン。そのすぐ脇では撥水性の布を取り出すジェイナスの姿がある。ハンターたるもの、多少雨に濡れたところで風邪をひくことなどないが、それでも余計な体力を使わない方がいい。またジェイナスの身につける赤い甲殻は湿気に弱いときている。

ジェイナスは布をシギユンに手渡しながら、笑ってみせる。

「じゃあ、ヘスティアの仇は近い。なんてね」

うまい冗談とは思えない。それでも、打算のない微笑みはシギユンの顔をゆるませるに効果的である。

あの声が、聞こえるまでは。

雨音を突き刺すように、雷を模倣するように、それは高らかに宙を叩いた。遠く、遠く、だが決してたどり着けないとは感じさせない。大きく、大きく、それは雷統べる獣の雄叫び。

手渡されることのなかった布が落とされる。大剣と太刀。それぞれが自分の柄を掴む。

一際大きな風が吹いた。それだけで、モンスターの気配はない。

シギユンは意識を声の方へと向けたまま、目だけでジェイナスを見る。

「今の、聞こえました？」

「行こう！」

「そう言えば、知ってるかい？」

道すがら、お喋りな義姉は始終スノードロップに話しかけていた。

「研究だと、峡谷には昔大きな河が流れていたらしいんだ。今はないけど、ほんの数百年前は水の豊かな場所で、南東のセクメーア砂漠にまで流れては大きな湖を形成していたらしいよ」

スノードロップはというと、崖下に見える濁流を眺めていた。上流。現在二人が向かっている方角に嵐が来ているらしく、大地に吸収されることのなかった雨水が寄り合わさってもっとも低い場所を集中して流れているのだ。

ソフィアの言うとおり、峡谷に河が流れていても不思議ではない。

「ほら、例のハイパーボリア文明が栄えた場所さ」

雨の中、傘はさしていない。冷たく、肌に服が張り付いてくる感覚が何とも不快である。また、小雨程度とはいえ、雨音の耳障りなこと。

スノードロップはソフィアの方を見ることもなく、ついぶっきらぼうに答えてしまう。

「それが今回の一件とどう関係するんですか？」

「何も」

あまりに飄々とした様子に、つい顔を向けようとして、それは理性が押しとどめた。聞こえてくるのはソフィアの楽しげな声。

「ただ、水のあるところに文明がある。この峡谷にも、かつては小規模の文明が栄えていたっていう説があるんだ。ムー文明って言うんだけどね、ハイパーボリア文明と使用している陶器や文字の形がとても近くてね、交流があったなんてことが噂されているよ」

ハイパーボリア文明とはセクメーア砂漠に五〇〇年も前に栄えたと言われる文明である。ただし、突如謎の滅亡を迎え、当時の様子は断片的にしか伝わっていない。

こんな話しは、ソフィアと考古学を趣味とする彼女の姉から幾度となく聞かされていた。

「でも、河の流れが変わってしまつて、あ、別に河と変わつてをかけたジョークじゃないよ」

「いいから先に進めてください」

せつかく話を聞こうと覚悟を決めていたのに、くだらない洒落に腰を折られたくない。

「ともかく、河が水を運ばなくなったことで、湖が枯渴してしまつたらしいんだ。恐らく、ハイパーボリア文明が滅んだのもそのためだろうね」

環境の変化が人や種を滅亡に追いやる。ありふれた話ではないか。こんな話をわざわざ聞かせようとしているのか。

つい猜疑的な眼差しを、横目で向けてしまう。

それは畏であつたらしい。ソフィアは微笑んでいた。つい、目をそらす。

「ところが、ここでもしろいことがあるんだ。河の流れが変わつたのは今からだいたい四〇〇年くらい前じゃないかつて言われてるところが、ハイパーボリア文明が滅んだのは五〇〇年くらい前が定説なんだ」

「一〇〇年もの開きをどうなさるおつもりです？」

「それがおもしろいところなんだよ。ムー文明が峡谷を離れた時期もだいたい四〇〇年くらい前で流れが変わつた時期と一致する」

五〇〇年前にハイパーボリア文明が滅び、その一〇〇年後に河を失ったムー文明が峡谷を離れた。

「ハイパーボリア文明は何故滅んだのか？ ムー文明とハイパーボリア文明の繋がりには？ 謎が尽きないよね」

もうこうなってしまうと止められない。お喋りに付き合うしかない。ただせめて、歩くペースだけは変えないよう、意識だけはしておく。

「学説は三説が主流なんだ。同一起源説。これは今ではだいぶ下火で、かつての主流派といった感じなんだけど、二つの文明を同じ起源を持つものと捉えて類似性を説明しようとしている。でも、これは滅んだ理由や原因に一切触れていない」

雨が徐々に激しさを増している。稲光と雷鳴の感覚から、嵐が近づいている。それとも、嵐にスノードロップたちが近づいているのだろうか。

「続いて交流説。二つの文明は交流があったとするもので、単純だけれどいろいろ説明がつくんだ。類似性はもちろんだけど、ハイパーボリア文明の人がムー文明に合流したんだとすれば、湖の枯渇以前にハイパーボリアが消滅したことの説明もつくだろ。もっとも、どうしてハイパーボリア人が住み慣れた砂漠を離れなければならなかったのかはわからない」

これまでの調査で峡谷に異変が生じていることは明らかである。そして、まるで待ちかまえるような嵐。ただの偶然。運が悪いだけだろうか。

「最後に同一文明説。交流説をちよつと変えたただけだけど、ハイパーボリア人が峡谷に来てムー文明を立ち上げたとする説だよ。もつとも、これもわざわざ砂漠を離れる理由を説明できていない。それに峡谷は決してすみやすい環境じゃない。それでもどうして、人々はこんな山岳地帯を選んだのか」

ソフィアは手を叩いた。

「結局、三説とも物足りないんだ」

一応、話しに一区切りがついたようだ。お話好きは今に始まったことではないが、仕事と私事を区別することくらいできる人だ。

「どうして今そんなことを話すのですか？」

「僕はね、偶然が重なるのは二つまでだと考えてる」

二つの偶然。そう言われて、思い当たることはない。そんなことが顔に出てしまったのだろうか。

「わからないかな。君のお姉さんが見つけてきた壁画はハイパーボリア文明末期のものだった。そして、僕たちは異変の起点とも思えるここドリームランド峡谷に、ムー文明の地へとやってきた」

砂漠と峡谷。遠隔地にありながら関連を疑われる二つの文明。

異変と峡谷。砂漠で起きたことが、峡谷に関連づけられる。

「壁画と峡谷。すでに二つの偶然が僕たちの前にはある。もしこれ

で後一つでも偶然が起きたなら、僕はこの二つの文明の謎こそが今回の異変の鍵だと確信するつもりだよ」

確かに、二人の主であるセントポリア第二王女はハイパーボリア文明から出土した壁画に並々ならぬ関心を抱いていた。

風翔龍クシャルダオラと炎王龍テオ・テスカトリ。この二体の古龍と戦うハイパーボリア文明の人々が描かれていた壁画。それが意味するところは未だもってわかっていない。

もしハイパーボリア文明とムー文明に何らかの関連があるのなら、この峡谷にその手がかりがある可能性は否めない。

そんなことまで考えていたのだとしたら、ソフィアも特務騎士の一人だと言うことだ。そんなスノードロップの考えを知ってか知らずか、ソフィアは朗らかな症状を崩そうとしない。

「まあ、知識の大半はフィロソフィア姉さんからの受け売りだけだね」

そんな特務騎士の顔が一瞬で固まったのは、嵐を押し退けてなおその存在を主張する咆哮が聞こえた、その時。

一気に吹き付ける風のような声が、方角、距離、位置を告げる。

「近いですね」

「急いじー」

世界は、これまでに一度たりとも人のものになったことはなかった。

人よりも強靱な肉体を有する生物はいくらでもいる。

地面に潜む線虫の類は人よりも数が多い。

生き抜くための知恵というものにおいて、モンスターは人よりも賢い。

だから人は世界に借りる。

モンスターから素材をはぎ取り、自然から恵みをいただいて。

それで支配した気になっていた。それで知った気になっていた。それで得意気になっていた。

箱を開ける度、自身の正しさが証明されていく。自分たちを脅かすものなどないということを思い込まされていく。

誰も知らないのに。誰からも証明なんてされていないのに。

箱の中に潜む強大な存在が、つい今し方開いた箱の隣の箱に潜んでいないとは誰も保証できない。箱を開けてみるまではわからない。

そして、一度開かれた箱は、二度と閉じることはできない。

第三話「孤高の射手と災いの招来」（後書き）

なかなか本格的な狩りをはじめられません。

また、私は特に考古学が趣味ということはありますが、何となく古代文明を絡めてみました。問題は五〇〇年前が古代と呼べるかということ。ただ、あまりに昔にしまうと歴史を考えるのがそれだけ複雑になってしまいますので、五〇〇年くらいが妥当なところでしょう。

そろそろ、砂漠にあった湖の名前を考えなければいけません。口プノールとか……。

第四話「孤高の射手と漆黒の轟雷」(前書き)

今回は少々長めです。

第四話「孤高の射手と漆黒の轟雷」

降りしきる雨の中、獣の叫び声が聞こえたとしてら、何が起きているか。簡単である。獣が叫んでいるのだ。その理由や状況というものは、やはり目で見て確認するほかない。

雨が降ってはいても、峡谷の固い岩盤は少しも抜かるんだ様子はない。水とずいぶん仲の悪いこの地質のせいで、峡谷は強い雨が降る度濁流が発生して地形を削り落としてしまう。

作物も育たないこのような場所を、生活の場を選んだ人々がかつていた。そして、今はもういない。

ここ峡谷に現存するのは大切な人を奪われた人々と仇として追われる竜。そして、そんな彼らを追う女性が二人。

そして、それ以外の何か。

平らな峡谷の大地。そのわずかにへこんだ窪地にたまった水を踏み散らして、ソフィアは走った。

アクラウの鎧は水分を含まない。ハンターとしての装備が動きにくいはずがない。それでも、雨の中を走るとは好きになれない。大粒の雨が顔に当たると視界が塞がれる。雨粒が大地を叩く音は雑音として状況把握を妨害する。

そんな中でも、相棒はかまわず突き進んでいた。大半が布ででき

たヒーラーは水を吸って重くなっているはずだが、先を駆け抜けるスノードロップは気にした様子はない。高くそびえ立つ崖がまるで壁のように迷路を演出している峡谷の中であつてもまるで目的地がわかつているようにその動きに迷いはない。

「スノードロップ、本当にこっちでいいのかい？」

つい声をかけると、スノードロップは振り向きはしない。これはいつものこと。そして、自分の能力に絶対の自信を持っていることも。

「間違いありません。あんなに大きな音、聞き逃す方が至難の業です」

確かに遠くまで聞こえる以上、大きな音であることに間違いない。ただし、距離がある上、激しさを増した雨音でかき消されがちである。加えて、峡谷のような入り組んだ環境下では音が反響して仕方がない。

ソフィアはとうに発振源を見失っていた。

それでも、スノードロップは決して見失ってなど、いや、聞き逃してなどいない。姫様からその力は結界をはるようだとまで言われた魔女が、音の届く範囲でその方向と距離を見誤る、いや、聞き誤るとは考えられない。

「君を信じるよ」

二人のハンターは雨の中、峡谷を駆け抜ける。

舞雷竜ベルキュロスは淡い黄色で包まれた黒の甲殻に、ところどころ短い毛が密生して生えている。その姿は優雅。翼から延びた鉤爪や、ほかの飛竜種には見られない副尾を踊り子の服飾のようだと評した人もいる。

ハンターを始めた頃からベルキュロスを狩り続けてきたジェイナスにとって、ベルキュロスの体はすべて危険な凶器でしかない。体の各所に発電機関である電撃袋を備え、鉤爪は広い範囲を鋭く薙ぎ払う。

ベルキュロスは美しくなんてない。対峙する度、ジェイナスの脳裏に浮かぶのはそんなこと。そして、今も体中の筋肉に電気を流されたような緊張を感じていた。

そう。今、目の前にベルキュロスがいるのである。

それは、異質の一言に尽きた。

黒いはずの甲殻が白にも近い灰色で覆われ、風を受け空に舞うことの多いベルキュロスにしては異常なほどたくましくその足で大地を踏みしめている。各所に紫色が配されたその姿は、どこか暗いものを感じさせた。

まるで、白骨と腐肉をまとうているように見えたからだろうか。

ベルキュロス亜種なんてものは聞いたことがない。しかし、こいつはベルキュロス以外の何かであり、そして、ベルキュロスであることに変わらない。

強大な雷の使い手であるベルキュロスに。

しかし、その瞳を支配するのは圧倒的な自然への畏怖ではなくて、より原初的感情。

怒りである。

「こいつが、こいつがヘスティアを……」

それは、ジェイナスを睨んでいるように見えた。何のことはない。見慣れぬ生物相手に警戒しているだけだ。このベルキュロスは、自分が一人の女性の命を奪ったことさえ知らないだろう。

隣ではシギユンが背負う太刀の柄をすでに握りしめている。

「はい。灰色のベルキュロス、間違いありません」

目撃者の言葉通り、そのベルキュロスは灰色の甲殻をして、各所に紫が乗せられた姿をしていた。峡谷はまだ調査が完全には行われておらず、謎の多い場所である。

どんな種が迷い込んでいたとしても、不思議なことなんてない。

「シギユン、準備はいいかい？」

「はい！」

考えるだけ無駄なこと。すべきことは、どうしたところで変わらない。

ジェイナスは駆けだした。まずは一撃。細長い顔にそうように伸びている角を砕いてやるつもりで、走る勢いを借りて牙狼大剣を背中から振り上げ、そして振り下ろす。水が充填された大剣は結露を開始している。十分な冷気と勢いで、大剣はベルキュロスの頭へと叩きつけられる。

鈍い手応え。ベルキュロスの頭部は比較的固く、慣れた手応えである。ただ、何かがおかしい。

冷気に弱いはずのベルキュロスでありながら、組織が変質した様子が見られない。

氷が利いていない。亜種の中には得意とする属性がまるで変わってしまふ種もいることを、ふと思い出す。

つい、大剣の勢いを殺すことを忘れて振り抜いてしまった。ベルキュロスの弾かれるように軌道が歪んだ大剣は、そのまま地面へと食い込んでいる。この状態からでは、すぐに動くことができない。

ベルキュロスはそんなジェイナスを構うことなく、頭上へと飛び上がった。

また、違和感。

ジェイナスに落ちる曇天から降り注ぐかすかな光に縁取られた影がまるで薄くなっていない。ベルキュロスが飛び上がったなら、徐々に薄くなっていくはず。

「ジェイナスさん！」

緊迫したシギユンの声。ジェイナスはハンターとして培われた本能とも言える直感で、前へと体を投げ出した。前転の要領で体を回転させると、うまく両足で立つ。

その瞬間に、大地が揺れた。振動が足に伝わり、立っていられず無様に転がってしまう。揺れに対する対処法はハンターが共通して体得しているはずだが、それができなかった。

その代わりとして、ベルキュロスの攻撃の正体を掴むことはできなかった。転がることで視線が後ろを向き、そこには翼から伸びる鉤爪をロープのように峡谷の大地に食い込ませているベルキュロスの姿があった。そして、その両足は力強く大地に立っている。飛び上がるなり、鉤爪を錨代わりにして一気に降下したのだろう。シギユンの声がなければ、最悪即死であつたかもしれない。

すぐには立つことのできないジェイナスに代わり、シギユンが太刀を振り抜いた。大剣に比べると器用な太刀筋を描く太刀がベルキュロスの翼へと振り落とされ、突き立てられ、振り上げられる。太刀にしては珍しい、鎌のように先端が大きく曲がった刃が、器用に翼膜を裂いてはわずかばかりの流血を引き起こす。

ジェイナスの狼牙大剣とは異なり、砂漠に暮らすモノブロスと呼ばれる飛竜種の素材を利用した太刀は、暑い砂漠に生きる生命の体温調節機能を一部再現する形で冷気を纏う。

しかし、シギユンの太刀も、冷気が十分に働いた様子はない。

それがシギユンに焦りを招いたのだろう。ほんのわずか、シギユンは欲を出した。本来はここで止めておかなければならぬ。そん

なラインを一步踏み越えて、再度太刀を振り下ろしてしまったのである。

ジェイナスは急いで立ち上がる。それでも、間に合うものではない。

体を大きくひねる動作。ベルキュロスが鉤爪を叩きつけようとしている合図である。狙いは前方のシギユン。シギユンは慌てて体を横へと回転させる。その位置は、辛うじて鉤爪の範囲から外れているように見えた。

背中側から、上空へと孤を描いて、鉤爪がしなる鞭のように叩きつけられる。固いはずの岩盤の一部が剥離して、細かい破片が宙を舞った。そして、黒い稲光が走った。

鉤爪を基点として、黒い光を放つ雷の固まりがいくつも地を這う。それはベルキュロスが見せる前方に集中的に放たれるものとは異なり、四方八方へと拡散する。悲鳴もなく、黒い雷に撃たれたシギユンが吹き飛ばされた。弾けるように白い小さな体が舞うと、叩きつけられ、地面を滑ったところでようやく止まる。

「シギユン！」

反応はない。手にはまだしっかりと太刀を握りしめていることから、意識までは失っていないのだろう。

「黒い雷……」

体勢を持ち直したジェイナスは、首こそシギユンの方へと向けながらも、その目は灰色のベルキュロスを睨んで離さない。

シギユンの身につけているフルフル装備は、雷を使役する飛竜の皮で作られているだけあって絶縁性が高い。まともに浴びたとは言え、一撃で立てなくなってしまうほどではないはずだ。

それでも、シギユンは太刀を杖代わりに、ゆっくりとした動作でしか体を起こすことができないでいる。

そもそも、ベルキュロスの操る雷は、色で表すなら黄色。天空の雷だとて、黄色が白だ。

目の前で、ゆっくりとジェイナスへと振り向こうとしている飛竜は何から何まで異質で異常であった。

「冷気もきかない。雷は黒い。君は一体……？」

雷を墜とすとまで呼ばれたジェイナスにとっても、それはあまりに見慣れた未知との遭遇に他ならなかった。

「視界良好。標的巨大。これで外せば、それはそれで自慢できる才能ですね」

鉾石より精錬された金属製の板を、やはり金属製のビスで繋いでいる。慣れない者には引くことさえ難しい強力な弓を、スノードロップは引き絞った。

雨は激しく降り注いでいる。

高い崖の中腹に設けられた通路のような棚。そこに、スノードロップは立っていた。ここからならば敵のすべてを見通することができる。

地に立つ灰色のベルキュロス。そして、その周りのハンター二人。赤い男と、白い女。

つがえた矢は三本。指を離すと、極限まで引き延ばされていた弦が矢を前へと押し出す。矢は、副尾と呼ばれるベルキュロス特有の平たい尾を正確に捉える。浅くしか突き刺さらずとも、流れ出た血が、確かな手応えを与えてくれる。

すると、新たなハンターに気づいたベルキュロスは体ごと振り向いてスノードロップを視界に収めようとする。

わざわざ目立つ高台にスノードロップが立った意味を、わかっていないのだろう。

表情に乏しい顔をして、スノードロップはドラギュロスを見下ろしていた。

加勢は、突然訪れた。

高台に立つ弓使いの女性に注意を引かれたその隙に、白い影がベルキュロスの頭を叩いた。水晶の塊のような装備を身につけた女性が、水晶の塊のような大剣を振り下ろしたのである。そのまま、隙を消すために横へと転がった女性は、ちょうどジェイナスの横で大剣を背中に担ぎなおした。

「あなたたちは？」

「話は後。今は、このベルキュロスを何とかしよう」

女性は立てた指を口に当てて、朗らかな笑みを見せた。確かに、のんびりとしている余裕はない。

高台の女性を狙ったベルキュロスはまた体をひねると、鉤爪を高台へと叩きつける。地面ほど平らでない壁は、うまく雷を逃がすことができず、大きく砕けた。破片は足下にまで散らばってくる。

女性は、幸いうまくかわいたらしい。こんなことは何でもない。そんな落ち着いた顔をして、ジェイナスたちと同じ地面に降り立った。こちらの方を見ようとしてもしないで、ベルキュロスを眺めている。

大剣の女性も弓の女性も、熟練したハンターであることに違いはない。

「シギユンは後ろに回って！ 僕は、この人と……」

言い終えようとして、実はこの人たちの名前を聞いていないことに気づいた。

「すみません。お名前を聞かせてもらえませんか？」

「僕はソフィアであっちがスノードロップ。スノードロップはどうかかわらないけど、僕はソフィアでいいよ、ジェイナス」

大剣の女性はソフィア。弓の女性スノードロップに比べると、ず

いぶん表情豊かな人である。微笑む顔に、つい照れくさくなって顔をそむけてしまった。

そして、またソフィアの顔を見るはめになった。

「……どうして僕の名前を？」

二人の大剣使いがベルキュロスの前に陣取る。大剣は分厚い素材でできているため、いざという時、盾の代わりに使えるため、囷役を務めるのである。そして、太刀は主に後ろから。弓は自由に動く。

即席のパーティをスノードロップは冷めた眼差しで眺めた。どうでもいいのだ。このベルキュロスを狩猟することが目的ではない。

それよりも、このベルキュロスの正体こそが問題である。

「灰色のベルキュロス……」

峡谷はギルドでさえ管理が行き届かない未開の地。これは公式発表ではあるが、真実とも言い難い。全部で三つある内の二つの王国がすでに何度も調査団を派遣している。ソフィアの言っていた文明の話も、そこで得られた調査結果の一つだろう。

その王国の一つがスノードロップ仕えるミスカトニック王国であり、調査報告書には目を通したことがある。

その中にさえ、ベルキュロスの亜種が存在するという記載は存在しなかった。

ベルキュロスが動く。スノードロップは弓をとつさに放った。弓は上体を引き起こしたベルキュロスの腹に命中する。もちろん、ハントーが一度に与えられるダメージなど微々たるものである。ベルキュロスは大きく翼を広げ、一気に前へと飛んだ。

峡谷を吹き上げる風を身に受け飛翔するベルキュロス。その動きは瞬きを許さないほどに素早い。この突進を横へと飛び退くことでかわした二人の剣士は大したもののである。

もつとも、そんなことよりも、ベルキュロスが纏う黒い雷の方がスノードロップの耳目を引く。

「それに黒い雷……。これはまさか龍毒？」

王立図書館の最高機密目録の中にわずかに記載されていた、すべてを腐食する毒。

この言葉を知るすべての者にとって、このベルキュロスに畏怖を抱かぬわけにはいかない、はずである。一握りの人間にしか読むことが許されない最高機密を知っているはずのソフィアは軽快な動きを見せていた。

ジェビアブレイド。灰晶蠍の甲殻を、灰晶蠍の水晶で固めた大剣を一気に振り抜く。大剣を使う者にとって最も多用することになる抜刀切りを、ジェイナスという男も同時に繰り出した。

二本の大剣が綺麗に頭に入ると、さすがのベルキュロスもうめきを上げて痛みを露わにする。そして、二人は別々の方向から切り払い、切り上げをそれぞれ繰り出した。狭い空間にありながら、二つ

の剣の軌跡は互いを邪魔し合うことなくベルキュロスの頭部を左右から強打する。

二人の剣士は、やはり鏡合わせのような見事な動きで左右に回転回避する。

「さすがベルキュロス狩りで知られるだけのことはあるね。いい動きしてるよ」

「いや、そんなことは……」

そんな軽いやりとりを二人はかわす。その顔にはまだまだ余裕がうかがえる。

「このベルキュロスも確かに行動に癖はあるけど、基本的な動きは通常のもので変わらない。今のところはね」

二人へとめがけて放たれる漆黒の雷。地を這うその光は、どちらを狙うでもない中途半端な方角へと放たれたことで、あっさりかわされる。

「油断さえしなければ何とかなるんじゃないかな？」

スノードロップには、その会話の内容がはつきりと聞こえていた。

まだ手に軽い痺れが残っている。この灰色のベルキュロスのは放った黒い光は、フルフルの皮を貫通して痛みをもたらした。

雷であるはずなのに、それは雷以外の何か。

まだ戦える。まともに浴びてしまったとしても、致命傷では決してない。

シギユンは太刀を抜刀した状態のまま、ベルキュロスの際をうかがっていた。ジェイナスたちに気を取られているとみるや、尾を狙って切りかかる。

モンスター用に作られた剣は鋭さとは無縁である。岩のような甲殻に叩きつけるため、鋭さよりも頑丈さが要求さえる。このような肉厚の刃で切断できるのは尾のような構造上弱い部位くらいしかない。その他の場所を切り取るなど夢のまた夢である。

そして、尻尾でさえ数回斬りつけただけでは鱗状の甲殻の一部を剥がすにすぎない。

これがモンスターと戦うということ。必殺の一撃なんてないことくらい、シギユンは知り尽くしている。敢えて気がかりをあげるとすれば、それは、ジェイナスと肩を並べて戦う女性が妙になれなれないこと。

「あの女の人、何だかジェイナスさんに近い……」

息ぴったりに攻撃を当てたり、回避したり。

「そりゃ、武器が同じで、立ち位置が近いのは当然ですけど、でも……」

何か納得できない。どんな話をしているのか、ここからでは聞き

取ることができない。

「ああ、雨がうっとおしい！」

完全な八つ当たりである。太刀を思い切りベルキュロスの尾へと叩きつけた。

シギユンは気づいていない。二つの八つ当たりをして、その内の一つは的を得ていたということ。

雨は、激しさを増していた。

風が吹いた。それは何とも不自然な風であった。バラバラに、気ままに吹き荒れていた風が、まるで誰かが号令をかけたかのように一斉に並んだ。

突如同じ方向から風が吹く。それはこれまでにないほど強いもの。

誰しもがまるで当然のように風へと顔を向ける。風に何が起こったのか。その理由を、起点に求めるように。かのベルキュロスとて、戦いをやめ、首を頭上に大きく持ち上げた。

そこは、人が踏み入ることのできない峡谷で最も高い大地。迷路のような通路を形作る崖の上。

「何だ……あれは……？」

ジェイナスはそれが何かわからなかった。見たことはない。聞い

たこともない。

生き物だとは思わなかった。しかし、生き物以外とは考えられない。では何故、それは金属の光沢を有しているのだろう。

「手足があるのに、翼まで……？ どうして……？」

シギユンは危うく太刀を取り落としてしまうほどの衝撃を覚えていた。

それは四本の手足でしっかりと踏みしめている。その様子を見せつけるように体を横へと向け、首を曲げてこちらを見下ろしている。

ではどうして、その背には巨大な翼が、風にも負けることなく広げられているのだろう。

「動かないで！ 下手に刺激しない方がいい」

雨音にも負けない声で、ソフィアが叫ぶ。

どのような生物とて、金属を使う生物は人間と獣人の一部だけである。しかし、それは金属を身に纏う。

どんな生物も手足、あるいは翼の合計は四である。それは、どれほど姿が異なっているも、同じ祖先を持つことの論拠となっている。しかし、それは手足に加え、翼を備えていた。

それを呼ぶ言葉は存在しない。飛竜ではない。魚竜でもない。鳥竜にしては巨大で、牙獣とは似ても似つかない。

「どうして古龍がこんな場所に……」

スノードロップの称した言葉は、現実には存在しない、絵空事の存在を指し示すものである。

第四話「孤高の射手と漆黒の轟雷」（後書き）

古龍なんていません。そんなことを第一章で言った気がしますが、やっぱり出してしまいました。

描写は次話に回しますが、モンスターハンターをご存知ならばきつとわかっていただけるほど代表的な古龍です。

第五話「孤高の射手と風翔の鋼龍」(前書き)

今回はちょっと長めです。ただし、戦闘シーンはほとんどありません。

第五話「孤高の射手と風翔の鋼龍」

古龍と呼ばれる存在は確かに実在する。

なかなかベッドに入らない子どもを寝かしつける時、悪い子は古龍が食べにやってくると言っただけでしかりつける。

時折、古龍を見たと言っただけでは周りをにぎわせるほら吹きが現れる。

古龍は実在する。人々の心のどこかに。人々の興味のただ中に。

そして、峡谷と呼ばれる、かつて砂漠を追われた民が隠れ住んだかの地にも。

その体はくすんだ銀色をしていた。鋼の色をしていた。生物の多くが持つような光沢のない淀んだ色合いとは違う。明らかに金属を思わせる光を返す。

その翼は広大。やはり金属光沢を放ちながら、降り注ぐ雨を弾く。翼は人で言うところの腕が変化したものでありながら、さらに四肢は別に備えられていた。

大きさは多くの飛竜と大差ない。

しかし、その纏う雰囲気、気配、そんな人が五感以外で感じ取ることができると思われるものがあまりに異質であった。

説明はできない。ただ、何かがおかしい。

細長い体。そのためどこか小柄な印象を与えながら、それだけ細面の顔つきが強調される。眼光は鋭く、無数の牙に、生えた角は決して穏やかな性質を想像させてはくれない。

大きさなら魚竜種の方が勝っている。力強さなら牙獣種の方が上ではないか。飛竜種の持つ迫力とて、決してひけは取らない。

それでもなお、それは巨大なモンスターと対峙することに慣れているはずのハンターたちを威圧していた。

四人のハンターは古龍を見ていた。崖の上。遙かに見上げる形で。

灰色の舞雷竜ベルキュロスもまた見上げていた。見た目よりもしなやかに動く首を高く持ち上げて、乱入者を睨みつけているようである。

そして、古龍は見下ろしていた。その目は明らかに先程まで狩るものと狩られるものであった人とモンスターを見ている。

古龍は体をゆっくりと、気だるげとも思える仕草で向きを変える。そして、突如上体を大きく上へ反らすとともに、吼える。

大気をその金属の甲殻で包まれた体躯に目一杯吸い込み、吐き出された空気は振動となって峡谷を駆ける。

恨み言をささやく。それとも、怯えおののいているのか。嵐として吹いていた風が前触れなく強く、まるで意志でも持ったかのように一斉に吹き荒れる。

その場の誰もがつい身を屈め、風圧に耐える必要があった。身動きできない。

そんな暴風の中を古龍は飛ぶ。細い身をしっかりと伸ばし、風を突き破る。翼は羽ばたいてその身を支える。ハンターたちの頭上を通り抜けて同じ地面に立つ。

すると、古龍を中心に風が膨れ上がる。踏みとどまることなどともではないができない。ハンターたちはあつさりと体勢を崩し、尻餅をつく者もいれば軽く浮き上がりそのまま地面に落下する者もいる。

唯一ベルキュロスだけが踏みとどまる。飛竜種の中では比較的体重の軽い舞雷竜とは言え、その重さは人とは比べものにならない。加えて、しっかりと両足で地を掴む行動パターンが、風に耐えられる姿勢維持に貢献していた。

古龍は空洞を吹き抜ける風のようにくぐもったうなり声をあげながら振り向く。他の誰へでもない。その視線は確実にベルキュロスを捉えていた。

ハンターたちは理解する。この古龍の狙いはベルキュロスに他ならないのだと。

ベルキュロスは怯えていた。それを端的に示して、その翼を一気に広げると、風を掴んで上空へと飛び立つ。飛竜種の中でも特に優れた飛行能力を有するベルキュロスは見上げるよりも早く嵐の空へと飛び上がる。

古龍は見上げる。その視界の中に、ハンターたちの姿など入ってはいない。口の端をつり上げて、鋭い歯を見せつけては、それはまるで嘲笑しているような表情を作り上げていた。

光沢を持つ甲殻の下で筋肉が蠢く。跳び上がるように飛び上がると、古龍の姿はあまりに早く空へと消えた。

まるで嵐そのものであるかのような古龍である。

先触れは静かなもので、動機はいつだとして理不尽。そして、人はそれが立ち去るまで耐える他できることなど一つもない。

嵐の空。風に煽られ雲が横殴りの雨を降らせる。時折、雷の稲光が黒雲を照らす。

嵐がどのようなものであるかを知る人は少なくない。しかし、嵐の空がどのような場所であるのか、見知った人間はまだ誰もいない。

飛行船を飛ばす技術は開発されていても、嵐の空を飛ぶことはあまりに危険が多い。よほどのことがなければ試して見ようとさえ思わないだろう。

たとえば、天敵に追いかけているとか。

ベルキュロスは翼を広げ、下からは風を、上からは雨を受けていた。眼下には起伏に富んだ峡谷が見える。

雷が鳴る。その轟音に紛れるように、古龍の咆哮がベルキュロス

を追っている。

首を曲げ、後ろを見ると、金属を纏う古龍が矢のような素早さでベルキュロスを追っていた。

舞雷竜ベルキュロスは飛行するために多くのものを犠牲にしている。たとえば、少しでも体を軽くするために甲殻が途切れている部分がある。このため、他の飛竜ではありえない、内部器官への深刻なダメージが及ぶことがある。

その代わりとして、ベルキュロスは空を自由に飛ぶ。

しかし、ベルキュロスも飛竜に他ならない。飛竜とは、飛ぶ竜ではなく、飛ぶことのできる竜なのである。はじめから飛ぶことに特化した鳥とは異なり、あくまでも生活圏は地上に限定される。飛行するにしても短時間、短い距離しか飛行できない。

それは人からすれば長大な距離にも思えるが、人の足で移動できないほどの距離は動かないのである。だからこそ、ハンターは限られた狩り場の中で空を飛び回る飛竜を追いつめることができるのである。

ベルキュロスとて例外ではない。すでに疲れが見え始めていた。峡谷から吹き付ける風で飛行するベルキュロスは、風が拡散してしまうため高空での飛行を苦手とする。普段見せないほど大きく翼を羽ばたかせるが、その動きは徐々に遅く、そして、高度が下がりつつあった。

異常なのは古龍である。ベルキュロスよりも速く飛行しながら、まるで疲れた様子はない。悠然と翼を動かしながら、ベルキュロス

の上空をとる。

風が号令をかけられたかのように一斉に動く。古龍の元へと殺到する。人一人をそのまま呑み込めてしまいそうな口が開かれると、風は我先へと口腔へと飛び込んでいく。

それだけで暴風と言えるほどの風が吹き、ベルキュロスの体を傾かせた。

そして、古龍の口から気弾とも言うべき圧縮された空気塊が放たれた。解放された大気の渦は雨粒を巻き込みはつきりとその軌道を描いた。まるで小型竜巻のようなそれは、雨を吹き飛ばし、雲をねじ曲げ、ベルキュロスへと迫る。

回避しようとする。そうするには、ベルキュロスはあまりに風というものに頼りすぎていた。

気弾と周囲の気圧さに身動きがとれなくなり、直撃こそしないまでも、鋭く渦巻く風はベルキュロスの翼膜を切り刻む。

悲痛なベルキュロスの叫び声が嵐の音にかき消される。

ベルキュロスは、塔のように立ち並ぶ峡谷の谷間へとゆっくりとその姿を消していった。

外の嵐が嘘のように、ここは静寂が横たわっていた。

大きく開けた空洞であり、かつて峡谷を流れていた大河が浸食し

てできた場所であるのかもしれない。その名残として、一角が崩れた場所には水たまりと呼ぶには大きな池ができていた。

池のある場所が窓代わりに、土砂降りの雨を空洞の中へと伝えている。

高い天井は、飛竜が飛び上がるに十分な広さがあった。竜が巣を作るにはうってつけである。その証拠に、奥には何かの骨が散乱し、生活の臭いをいうものを感じさせていた。

そして、もう一つ。

水はけの悪い湿った地面に張られた蜘蛛の巣状の網。麻痺毒固有の黄色い光が光の加減で瞬いているように見える。

シビレ罨である。

獲物はこの巣の主。

翼膜が裂け、鉤爪の甲殻が鱗状に剥がれた痛々しい姿をさらしながら、灰色の甲殻を持つベルキュロスが足を引きずり徐々に罨へと近づいていく。

色を判別しにくい飛竜にとって、罨を事前に察することは不可能に近い。ベルキュロスはシビレ罨に足を踏み入れた途端、麻痺毒が足から一気に全身に回る。

全身の筋肉が伸びきり、麻痺した声帯からは細々とした甲高い声しか出てこない。

完全に身動きを封じられたベルキュロスを取り囲んで、空洞の暗がりに身を潜めていたハンターたちが現れた。手には赤い玉。捕獲用麻酔玉を一斉に投擲する。拳大の麻酔玉はベルキュロスにぶつかると瞬く間に気化し、皮膚から気管から麻酔成分を侵入させる。

弱りきったベルキュロスの体を、昏睡状態に陥れるには十分な量であった。

横たわり、穏やかな寝息さえ聞こえてきそうな気がする。麻酔が完全に聞いていることを、ソフィアは確認した。とは言っても、ちよつとベルキュロスの顔を撫でてみただけで、効いているということにしておこうと判断しただけであるのだが。

ともかく、灰色の甲殻を持つベルキュロスは無事捕獲に成功したのである。

「巢を見つけられたのは幸いだっ たね」

ベルキュロスから目を離して見回すと、三人のハンター。

相変わらず目を合わせとしようとしなないスードロップは用心深くベルキュロスの傷の具合を確認していた。この黒い看護師は別に治療法を考えているわけではなく、単に古龍の力量を計っているだけだろう。

残り二人のハンターは共通して深刻そうな顔をしていた。男性の方は仮面状の兜をつけているため、表情そのものはうかがえないが、目と声からでも十分にそれはわかる。

「お願いしたいことがあるんだ。このベルキュロスを、僕に任せてもらえないかな？」

「私からもお願いします。このベルキュロスは姉さんの仇なんです」

フルフルの皮に身を包んだ少女は、大げさなくらい頭を深く下げた。健気な様子で、いたたまれなくなる。

もつとも、そんな感傷はソフィアだけのものであるらしい。スノードロップはベルキュロスから離れると、二人のハンターをその間合いに入れる位置へと移動する。

その様子を横目で見ながら、ソフィアもまた、心構えを決める必要があった。

「それが駄目なんだ。君たちに渡すこともできないし、それに、君たちも連れて帰らないとならないから」

「どういうことだい？」

わからないと言ったジェイナスの声。反対に、スノードロップの言葉には力が込められていた。

「こういうことです！」

スノードロップが跳び出す。反応どころか、警戒さえしていなかった少女、シギユンの腹部に拳を入れると、痛みにつめくシギユンの腕をひねる。白い少女が地面に押しつけられるまで、ジェイナスは動くことさえできなかった。

それも一瞬のこと。ジェイナスはすぐさま仲間を助けようと背負った大剣の柄に手を伸ばす。ソフィアは一気に、その手に自らの手をそつと添えた。

ハンターの扱う大剣は対モンスター用の大型のものであり、通常は走る勢いで振り抜く。立ち止まった状態からでは構えることがせいぜいだろう。そして、抜く前あれば、ほんの少し力を加えるだけで大剣を完全に封じることができる。

「君は、ハンターとして優れているけど、ハンターでありすぎる」

仮面の下で瞳が、瞳孔を拡散する様が見えるくらい近い位置。

ソフィアはジェイナスの足を払い、手をひねることで投げと拘束を同時に行う。地面にうつ伏せに叩きつけられたジェイナスの上に乗る形で、不自然な角度に曲げられた手を抑えた。

「モンスターは間接技なんて仕掛けてこないし」

刺すつもりなんてない。それでも恫喝の意味で、スノードロップは兜と鎧の隙間に割り込ませる形で小型ナイフをシギユンの首筋すぐそばに突き立てた。

これでは防具など何の意味もない。

「急所を狙ってくることもないから」

ハンターの防具は、通常のモンスターの攻撃が体に直接触れることがないよう計算されて作られている。ただし、人間のようにその

構造を把握し、急所を狙う存在相手には無力だ。

密猟者二人を確保。及び稀少種の保護を完了。

二人は壁に背をつけるように座っている。武器にアイテム・ポーチは密猟者から離れたところに置いてある。スノードロップは武器を確保する形で、そのそばに立ちながら密猟者の様子を観察していた。

男の方は二〇代前半だろうか。電気を通してにくい紅溶岩竜の素材を用いた装備をしているところは噂通りベルキュロスの相手に慣れた様子である。取り外された仮面の下には、威圧感だとか覇気とは無縁の顔つきがあった。それでいて、頼りなさを感じさせない雰囲気は如何にも優男と言えた。

どこか、姉の恋人と印象が似ている。

女の方はやや若い。ハンターにしては少々小柄なせいか、実年齢よりも幼く見られるのではないだろうか。モンスターを追いかけるよりも村の中で平穩無事にすごしていた方がよいのではないだろうか。

問題は、二人は何ら制約を受けていないということである。スノードロップは横目で同僚の姿を探す。

「縛り付けなくても？」

「そこまですることないよ。武器は預かってるしね」

ソフィアがこちらに顔を向けようとしていると見るや、すぐ視線を外す。するとたまたま、男の方、ジェイナスが体を動かしている様子が目に入る。

「君たちはギルドナイトなのか？」

「違うよ」

「それなら、逮捕権はないはずだ」

何を言い出すのかと思えば、まだ自分たちのしていることが理解できていないらしい。そんな浅慮な輩相手にも、ソフィアは親切丁寧に説明をしようとする。

「そこには二つ間違いがある。まず第一に、僕たちは君たちがギルドの許可を受けていない不正規の狩猟の現場に居合わせた。現行犯や緊急の場合に限り、私人による逮捕は認められているんだ。それに、あまり大きな声じゃ話せないけど、僕たちにはちょっとした特権を与えられている」

ギルドの許可なく峡谷に分け入り、モンスターを殺害するなど許されることではない。ハンターは皆ギルドに所属しなければならぬ。そして密猟は重罪であり、場合によってはハンター資格を永久に剥奪されることもありうる。

そのことを、密猟者たちはわかっているのだろうか。

「確かにギルドの許可なく狩りに出たことはすまないと思う。でも、人を襲った個体はできる限り早急に討伐しなければならない！」

「それに、ジェイナスさんは大切な人を失ったんです。その気持ちを、わかってあげてください！」

敵討ち。ずいぶんとくだらない理屈を持ち出してきたものだ。

スノードロップは息を吹く。

「このベルキュロスが仇であるという証拠は？」

未だに寝息をたてて横たわる灰色のベルキュロス。確かに目立つ個体であることに間違いないが、人を殺せば罪に穢れ甲殻から色が抜け落ちるなんてお話はない。

「証人がいます。私が、確かにこの目で見ました」

シギユン。確かそんな名前の少女はその指で大きな丸い瞳をさし示す。

もう一度ため息をつく。

「あなた方は二つの過ちを犯しています。一つは、このベルキュロスが人を襲ったわけではなくて、単なる事故です。また、このような稀少種である場合、狩猟が許可されるかどうかは、さらに厳密な審査を必要とします」

古龍との関係から推測するに、ベルキュロスが逃げ込んだ先が偶然村であったというだけなのだろう。

そして、世の中はすべて秤で動いている。実行した際のメリット

と、しなかった場合の利益を比べ、よりよい方が選択される。この場合、ベルキュロスがたとえ故意に人を襲ったとしても処分が許可される確率は半々がいいところ。

ましてや、このような私刑が認められるはずがない。

目は合わせていない。視界の隅に捉える形で眺めるジェイナスの様子は、視線を下に落としうなだれている様子である。

「それは、わかっているつもりだ……」

「つもりではお話になりません。あなた方の行為は危険きわまりないものです」

反省すればいいというものではない。省みて当然のこと。

スノードロップのわかっている範囲でも二頭のベルキュロスがすでに殺害されている。

「ここに来るまでに喰い荒らされたベルキュロスの死体を見つけました。殺したのはあなたで、食べたのはあの古龍でしょう」

それともこんな短期間に殺したベルキュロスの数を褒めるべきだろうか。あなたは人としては問題ですが、ハンターとしてだけなら優秀ですと。

「あなた方が狩猟しただけでベルキュロスの個体数を減少させられるとは考えてはいません。しかし、ここは峡谷の中でも比較的浅いところですよ。仮に古龍が峡谷の奥でベルキュロスを捕食していたのだとしたら、あなた方が殺したベルキュロスの死体に導かれる形で

この地区にまでやってきた可能性があります」

仮に古龍がベルキュロスよりも高次の消費者であったとしたら。

「そんなことは……」

「ないとは言い切れません。なぜなら、峡谷は未だに生態系が把握できていない地方であるからです。そして、そのために、立ち入りが制限されています」

いつまでも密猟者の相手はしてられない。灰色のベルキュロスの様子を確認するふりをして首の角度を固定する。

「復讐は結構。ただし、それが新たな悲劇を招く可能性があるのだとしたら、なんて浅はかなことでしょう」

「そんな言い方！」

シギユンが立ち上がる。威勢はいいが、別に続く言葉を考えていたわけではないらしい。

「あなた、このベルキュロスが仇だと言いましたね。その目で見たと？」

「は、はい……」

ベルキュロスの方へと歩く。近づく、なかなかかわいらしい寝息が耳に届く。

「私が聞いた目撃証言では、あくまでもベルキュロスらしいという

ことだとまでです。何故、あなただけがベルキュロスだと、それも確認されてもない種だと断言できるのです」

「それは……」

ベルキュロスの甲殻に触れてみると、肌を焼くような弱い痛みが指先に生じる。

「いたのですね、その現場に。それでも、誰もそのことを知りません。それは何故ですか？」

小娘のことを見るまでもない。どうせ、小さく震えているだけだろうから。

「あなたは、逃げたのでしょうか？」

返事はない。時折天井から落ちた水滴が床の水溜りに落ちた音がある。

「装備を見る限り、あなたがベルキュロスと戦った経験は少ないものと推測できます。それなら仕方ありません。ベルキュロスが怖くて逃げ出しても、それとも、敢えて見捨てたのでしょうか？」

直視はしない。それでも視界の隅にシギンを捉えると、ただでさえ小柄な少女はより小さく見えた。膝を両手で抱くようにして座っている。

だが、何もシギンのことが見たくて首を回したわけではない。赤い鎧を身につけた男を視界に入れるためである。

「あなたは、その男に好意を寄せていますね」

大体想像はつく。雨が降る村。帰り道を急ぐシギユンだけが道に出ていた。そこへベルキュロスが現れたのだろう。シギユンが注意を引けばベルキュロスは人家に降りることはなかったかもしれない。ヘステイアという女性が死ななくてもすんだかもしれない。

しかし、シギユンはまだ一人でベルキュロスを狩るほどの力はないのだろう。やり過ぎすこともハンターとしての冷静な判断だと言えなくもない。

ただ、そこに私情が含まれていないとは限らない。

「でも、男は姉の恋人。誰でも考えるでしょうね。このまま放っておけば恋敵は死んでくれる。そうすれば、愛しい人が自分を見てくれるかもしれないと」

そうして、姉を亡き者とした。恋敵は死に、自分は愛しい人と敵討ちと称して危険な冒険に出向く。あなたの恋人を見捨てました。このことは隠した。あなたの恋人を殺した相手を知っています。だから2人でそれを探しましょう。

「楽しかったですか？ 思い人とのアバンチュールは？」

反応を見せたのは意外にも恋人をベルキュロスに殺されて、その妹に見殺しにされた男の方であった。突然立ち上がるなり、スノードロップの方へと勢いよく歩いてくる。わざわざ見る気にもなれず、ベルキュロスの様子を眺めることにする。

「やめてくれ！ 一体何の根拠があってそんなことを言うんだ！」

「男にはわからない、女同士にだけ通じる勘、でしょうか。それに、私に突っかかっている暇があるなら、否定してもらっては如何ですか？」

少し首を曲げる。すると、ジェイナスも釣られてスノードロップが誘導する人物を目にする。その目に涙さえ浮かべて、小さく震えるしかできないシギユンへと。

「私は姉を見捨ててません。私はあなたに好意なんて抱いてません。私は、姉の死を喜んでなんていませんと」

「やめて、ください……」

雨音の中、その声はかすれてほとんど聞こえてはこない。

「お願いです……、やめて、ください……」

外ではまだ土砂降りの雨が続いていた。この雨はまだまだ止みそうにはなかった。

第六話「孤高の射手と古龍の監視者」(前書き)

少々遅れてしまいました。

第六話「孤高の射手と古龍の監視者」

左右を切り立った崖に囲まれた細長い通路。疎らな雨を崖を吹き抜ける風が撫でる。それを左右から眺める壁には、いくつもの時代の残り香が見られた。遺跡である。すでに人工の建造物と思われるものは何一つ残されていないが、壁には、かつては色鮮やかであったであろう壁画が色あせた色を覗かせていた。

崖には平たい台がいくつもあり、それぞれに人々の姿が疎らにある。もっとも低い場所には複数のテントが張られ、峡谷に持ち込まれた道具がその周りに整然と並べられている。ハンターの持ち物にしては大がかりであり、武装の類は認められない。

彼らは調査隊であつた。

かつての光景に思いを馳せ、かすれた日記を読みとくように過去を明らかにする。一見するなら、それは意味のないことである。現在とは直接関わりのない昔の出来事を今更ほじくり返したところで何になるうか。

少なくとも、この調査隊を率いるフィロソフィアは意義と意味を感じていた。普段なら長く垂らしている髪を、それでは作業の邪魔であるからと頭の後ろに束ねている。二〇代も後半に入ると、髪の手入れに昔以上の時間がかかるようになった。

それを疎ましく感じたことはあつたが、徐々に老いを覚え始めたことを嘆いたことは一度もない。知識は満たされ、英気は養われ、若かりし頃以上に充実している。

ミスカトニツク王国に任され、遺跡の調査発掘を指揮できるようになったのは、ほんの数年のことである。そして、その調査こそが好奇心を満たしてくれる。

無駄なことなどない。歴史は、同じ人が同じように生きようとしている限り、同じような行程を繰り返す。逆に言えば歴史を知ることとは未来を知ることにも等しい。

たとえば、何故、このムー文明は衰退してしまったのか。それを示す鍵が、今、フィロソフィアの目の前にはある。

白と黒の塗料で塗りたくられたのは憎しみの現れ。か細い線と力強い線とで描かれているのは恐怖と、それに打ち勝つ意志の現れ。それは巨大な翼を持ち、さらに加えて四本の足を有していた。かすれて見えなくなってしまった部位に描かれているのは恐らくは風。

手を大きく広げてもとても足りないほどの壁画。風まとう古龍、風翔龍クシャルダオラの存在を、ムー文明の人々は知っていたのだ。

現代では王国規模の情報統制が張られ、その存在を知る者は限られる。そして、それが徹底されている背景には、古龍が滅多に目撃されない事実があった。

「フィロソフィア姉さん！」

突然の声。壁画から目を離して首を曲げる。すると、灰晶蠍の防具を身につけた若い娘が走り寄っていた。背中には、大剣を背負っている。

妹であるソフィアである。もう今年で二〇歳になるというのに、

言動から子どもっぽさはなかなか抜けることはない。

フィロソフィアは姉として、抱きついてくる妹を、素早くかわした。目標を失ったソフィアが峡谷の固い地面に飛び込む。しばらく動かないと思いきや、立ち上がる時も勢いがいい。

「ひどいなあ、姉さん」

今、フィロソフィアは防具を身につけていない。布を用いただけのごく簡単な服装しかしていないのである。そんな時、強固なモンスター素材を着たまま抱きつかれたらたまったものではない。

もつとも、悪戯好きな妹のことである。わざとだ。

「古龍を見たんですって？ いい体験したわね。まあ、そのせいで調査は一時中断だけれど」

同じくミスカトニツク王国に仕えるものとして、ソフィアが特殊なベルキュロスに出会ったこと、そして古龍を目撃したことはすでに聞き及んでいる。古龍の出現は、場合によっては激甚災害に指定されるほどの大事である。そのため、スタッフたちが荷物をまとめ、撤収準備を始める姿が見られるようになってしまった。

「散々だよ、ろくな準備もない状態で会いたくなかったから」

実際、特務騎士とは言え、二人では相手にすることは避けた方が賢明である。

ここにはソフィアと、そして無愛想なスノードロップの二人しか戦える者はいない。見ると、スノードロップは離れた位置で、目を

向けた途端顔を背けてしまったらしい。相変わらずであるらしい。姉がやたらと愛想を振りまいている様子とはまるで違う。

そんな射手の後ろに、見慣れない2人の姿があった。

男性の方は恐らく二〇歳を超しているのだろうが、どこか表情があとけなく、母性本能をくすぐられる顔をしている。

女性は一〇代で間違いないだろう。小柄であることに加え、気が弱いのか男性のそばについて離れようとしないため、輪をかけて小さく見えてしまう。

「あの二人は？」

「密猟者、とは言いたくないけど……」

妹が言葉を濁したところを見ると、この二人が敵討ち無断で峡谷に入り込んだ違法ハンターであるらしい。

ソフィアの側を離れ、目を合わせもしてくれないスノードロップの脇を抜けて、フィロソフィアは二人に話しかけた。

「ちょっとお話ししませんか？」

躊躇したように顔を見合わせる二人。

「そうしましょう」

かまわず男性——名前はたしかジェイナスと聞いている——の手を引いて歩き出す。少女、シギユンはやはりついてきた。

もういいだろう。手を離して、今度はその手で崖の中腹に描かれた壁画を示す。

「ここはムー文明の遺跡。ちょうど私たちが立っている場所に河が流れていて、その両岸に人家が並んでいたんでしょうね。もっとも、それも四〇〇年前のことだけど」

人が忘れてしまった時間の面影が、ここにはある。

「古代ムーの人たちは、こんなに過酷な環境を敢えて住処に選んだ。それはどうしてだと思います？」

シギユンの目がジェイナスを見る。とうのジェイナスはあっけらかんとしていた。

「さあ……」

「私にもわかりません」

思ったよりも反応が鈍い。瞬きをする回数を増やしたくらいで、こいつは一体何を言っているんだと言外に言われているようである。

「そう気を悪くしないで。わからないことを調べることが、私たちの仕事だから」

「あなたたちは……、一体……？」

ここで初めて、まだ自分が名乗ってさえいないことに気づかされた。

「私はフィロソフィア。私たちは王立古龍観測隊」

「これは、龍殺しの実、かな？」

妙に分厚い樽一杯に積まれたいびつな赤い実を、つい掴みやすい大きさだからと、ソフィアは手にしてみようとした。

「ああ、触らないでください。龍毒がこぼれる危険性がありますから」

呼び止めたのは、小さな樽を両手で支える作業員である。まだ若いせいか、その態度はどこか弱々しい。

「峡谷に龍殺しの実があるとは聞いたことはありません」

ちよつとスノードロップに横目で見られただけで軽く萎縮した様子を見せた。

「い、いえ、あの崖の上ですよ。日中は絶えず太陽光に晒され続けるし、夜は岩盤が急速に冷えることで冷気に晒される。おまけに、こんな嵐の日には風を防いでくれるものは何もない。そんな過酷な環境にしか自生しないのが、龍殺しの実なんです」

手が塞がっているため、顎で天をさす青年。崖の上では遮るものが何もないため、雨の滴が峡谷の底とは比べものにならないほど降り注いでいることだろう。

「こんなに大量に？」

忠告に従い、ソフィアは手を樽の上にかざすだけに止めた。

「研究に使うらしいですよ。龍毒はすべてを腐食させる。それは、古龍とて例外じゃないそうですから」

「対古龍用の兵器にすると？」

スノードロップの質問には、さあ、そんな一言を残して青年は行ってしまった。本当に知らないのだろうか、同僚が苦手意識をもたれてしまったことも間違いないだろう。

スノードロップはいつも損ばかりしている気がする。

しかし、それも今に始まったことではなくて、すなわち、すぐに解決できることではなかった。

「気になることがあるんだ。あのベルキュロスだけど、どうして龍毒なんて使ってるのかな？ 腐食毒は自身にとっても有毒なはずだよ」

何か龍毒を無効化できる機構でもあるのだろうか。相違として発した疑問を、スノードロップは別の意味に捉えた。

「ベルキュロスがクシャルダオラに捕食されていたことから考えると、古龍がベルキュロスの天敵であると考えられます。それなら、それに対抗するために毒を持ったという考え方もできますね」

それは喰い荒される花がやがて毒をその身に宿すことと同じこと。

「確かに、龍毒は古龍に対して特に有効だよ。でも同時に、古龍の素材から龍毒が生じていることも観察されているんだよ」

まるで矛盾した話ではないだろうか。自分の巣にかかる蜘蛛なんていない。中毒に苦しむ蛇もいないだろう。龍毒を発する古龍が、龍毒に弱いなんてことが本当にあるのだろうか。

しかし、龍毒が古龍に有効であることも、龍毒を古龍の素材が発していることも事実である。

残念ながらこの同僚は彼女の姉ほど考察というものを得意としていない。考えがないというわけではないが、結論を出すことを急がないあまり、材料が揃っていないと判断すればすぐに考えることをやめてしまう。

そして、すぐに材料を求めようとする。

スノードロップは見ていた。谷の隅に、ロープで固定されたベルキュロスの姿を見ていた。捕獲用麻酔玉の効果は絶大であり、あんな巨大なモンスターを捕獲することが可能となった。

「ともかく、あのベルキュロスを早く峡谷の外に連れ出さなければなりません」

灰色の甲殻と、禁断の力を放つ舞雷竜を。

「王国もギルドもひた隠しにしているけど、古龍と呼ばれる存在は

確かに存在するわ。あなたたちが見たのは、私たちが風翔龍クシャルダオラと呼ぶ存在」

フィロソフィアと名乗った女性の話は、そのすべてを信じるわけにはとてもいかなかった。少なくとも、ジェイナスは努めてすべてを信じようとはしなかった。

しかし、話の矛盾を導き出すことは一度たりともできていない。それはすなわち、徐々に信憑性を増してくる。

「古龍とは、一体何なんですか？」

椅子代わりに与えられた樽。うつむいた視線を無理に上げると、やはり樽に座っているフィロソフィアが目に入る。足を組み、その様は妖艶。まるで、お伽話の魔女みたいに。

「人とも、竜とも違う存在。わかっているのは、生命が暮らせないような極地に生息して、絶大な力を持つということ」

まるで嵐を引き連れてきたような姿を思い浮かべる。それと同じ姿をした壁画が、ちょうどフィロソフィアの後ろの壁に描かれていた。見上げるほど大きな壁画に。ただそれは、長年風雨にさらされ、細部は劣化が激しい。

「人類の歴史の中で、限られた数でしかないけれど、古龍との接触は確かに存在した。ムー文明や、ハイパーボリア文明の壁画には戦いの証拠が残されている」

そればかりではない。少し首を回すだけで壁画はいくらでも見つけられる気がした。隣に座るシギユンも同じように見回し、壁画を

見つけるとわかりやすく瞬きをした。

「僕たちは峡谷に何度も来ましたが、まさかこんなことがあったなんて……」

「あなたはハンターでしょ。ハンターにとって、遺跡なんて地形の一部」

確かに、いちいち観察したことなんてなかった。芸術だとか、美術だとか、人の最も高度な活動に取り残された気がして、つい顔を気恥ずかしくなった。

フィロソフィアは小さく笑う。

「私たち古龍観測隊はそんな古龍の存在を探るミスカトニツク王国の秘密組織よ。もちろん、ハンターズ・ギルドの協力の下ね」

こんなところを、すぐに信じることはできない。ミスカトニツク王国と言え、三つしかない王国の中でも徹底した秘密主義で知られている。その秘匿している蔵書の中には世界を根底から揺るがしてしまうような禁書が存在すると与太話で語られることがあるが、ジェイナスはそれを噂話以上に捉えたことはなかった。

そんな王国の住民だと言われても、実感というものを伴わない。そんなジェイナスの心を見透かしてか、フィロソフィアはやはり笑う。

「本当は、この壁画の中央を見たいのだけれど、この岩がとても堅くて駄目なの」

伸ばされた手は、辛うじてその岩に届いた。叩かれる度、岩が不満を音として表現する。

大きな岩は、左にフィロソフィアの後ろに描かれた風の古龍と、右側に恐らくは炎の古龍を侍らせている。これは、たとえ考古学に興味がなくとも、この岩の下に何が描かれているかを見なくなる。

もつとも、ハンターの武器でも壊せはしない。大タル爆弾を使っても壊せるだろうか。

それでも、何とか破壊する手段はないだろうかと考えを巡らせている内に、シギユンはほかに興味を移していた。

樽から立ち上がり、歩いていったのは、別のやはり壁に大きく描かれた壁画であつた。岩に隠されている壁画の右側で、壁が弧を描いているため、座ったままで絵を確認することができる。

「すいません。この壁画は？」

磨耗が激しく、所々がすり消えて見えなくなっている。

それでも、辛うじて見えたのは、鮮やかな塗料で描かれた、花。

「新発見のものよ。左側が戦いなら、右側は弔い。戦いで亡くなった人たちに花を捧げているところでしょうね」

「昔の人たちも、花を捧げたんですね……」

ここに、愛する人を亡くしておきながら、花一つ捧げてこなかった男がいる。フィロソフィアは、そこまで聞き及んでいるだろうか。

「人は生きている。だから必ず死ぬ。そんな時どうするかは人それぞれ。花を捧げて弔ってもいいでしょうし、武器を片手に復讐に走る人もいるでしょうね」

思わず、体が緊張する。

「こんなお話を知ってるかしら？ 復讐は、何故行われるのか。それは、悲しみにつき動かされたものではなくて、あくまでも防衛本能でしかないわ」

怖いものでも見るように、ジェイナスは顔を上げた。年上の女性は、微笑むことをやめて、その眼差しはジェイナスとシギユンを同時に見つめた。

「復讐は、考え方を変えるなら、単なる予防処置にほかならないわ。別に復讐を果たしたところで大切な人が生き返る訳ではないでしょう。それでも、仇は大切な人を奪ったという事実がある以上、ほかに比べて危険な存在であることに間違いない。そうすると、復讐の目的は、これ以上身近な人を奪わせないためにあらかじめ危険を排除しようとする行為に他ならない」

「復讐は、これ以上の悲しみを増やさないため……、死者のためじやなくて……」

「だから、手段と目的を捉え違えてしまうことがあってはならないわ」

「僕たちは……」

何が言いたかったのか、自分でもわからなくなってしまった。言い終えるよりも先にフィロソフィアが言葉を重ね合わせた。

「恋人の仇をとりたいんですよ。でも、あのベルキュロス、私たちは冥雷竜ドラギュロスと呼んでいる種は、あなたの仇じゃないかもしれない」

「どうしてですか？」

シギユンの言葉につられて、フィロソフィアは少女の方へ視線を移す。

「本来峡谷から出ないはずのベルキュロスが人里にまで降りてしまった理由、それは、クシャルダオラに追いかけてたからかもしれないでしょ。ドラギュロスは結果であって、原因ではないかもしれない」

「どういうことですか……？」

「たとえ話をしましょうか？ 石をぶつけられたとしたら、あなたは石を殴りつける？ それとも石を投げた人に抗議する？」

話は突然の終わりを迎える。他ならぬフィロソフィアの手によって。

「撤収作業急いで！」

何か変化があったようには思えなかった。しかし、話と同じで、フィロソフィアは確信を抱いていた。

それが、真実味を与え、緊迫感が声と同じ速度で広がっていく。

思わず立ち上がったジェイナスの額を、大粒の雨が打った。

「また、嵐が……」

そして、曇天の空に古龍の咆哮が響きわたる。

荷物を放り捨てて逃げる人々。スノードロップはソフィアと並んで、その流れに逆行して走る。

背中に弓が背負われているのか、つい確認してしまったのは、それだけ不必要に緊張していることを意味している。

視界の片隅にソフィアの姿を捉える。

「これまで古龍と戦ったことは？」

ソフィアはわざわざ首を回してスノードロップを確認する。

「一度だけ。それも、姉さん二人と一緒にだったし、三〇人からなる支援がついた。二人で戦うなんて初めてのことだよ」

フィロソフィアは装備がない。恐らくは調査隊も護衛のハンターくらいは連れていることだろうが、並のハンターでは足手まといにさえならない。

「私は見たことしか、いいえ、見たことはありません」

かつて、お姉様がたったの二人でしとめた古龍。それを確かに見た。しかし、見えなかった。どうでもいい記憶である。大切なことは、お姉様の戦果と、その名誉を汚す戦いだけはできないという事実。

嵐が風を吹く。雲が裂け、それでも陽光は差し込むことがない。そんなかな希望をあざ笑うかのように、それは降りる。

風を翔ぶ龍。風翔龍クシャルダオラが風を臣下に、雷鳴を樂團に、動物に不釣り合いな残忍な笑みを浮かべながら。

飛ぶこともできないちっぽけな人間に、わざわざ合わせてやるように峡谷の大地へと降り立つ。

弓を振り絞る。大剣を掴む。

「討伐は狙わず、みんなが撤退するまでの時間稼ぎだね。それでも、だいぶ辛いけどね」

大気を震わせ、龍が吼える。

つがえた矢。振り絞られた弦が矢を放つ。

第七話「孤高の射手と血塗れの恋」

降りしきる雨。吹き付ける風。そんなものは問題ではない。より狡猾で、より恐ろしい存在に人々はつき動かされていた。

「撤収急いで。荷物は放っておきなさい」

フィロソフィアの言葉を聞くまでもなく皆、取るものと取らず己の速さの限界を試していた。

人々の流れの中に立ち、嵐の方から流れてくる臭いを、フィロソフィアは敏感に感じ取っていた。

それは香水のような香しい人工のものとは違う。より、秩序を簡単にには見せない自然の造形。

それは野生の動物の血と汗。生きると言うことにひたむきな純粹さとも違う。

それは誇り高く、そして傲慢。これまで感じた臭いのすべてと違い、そして、どこも歩み寄る姿勢というものを見せない。

どれよりも異質で、どれよりも異端で、何より生き物にしてはあまりに着飾った臭い。

「嫌な臭いね」

桃毛獣ババコンガとどちらが嫌かと問われれば、悩まされる。

それと今、妹は、ソフィアは対峙している。

「ソフィア、無事でいて……」

準備もなしに古龍に挑むことの愚を、私たち三姉妹は知っているのだから。

また怖いものが来た。あの時とは比べものにならないくらい。

でも、ジェイナスはシギユンの、この震えを抱き止めてはくれない。仕方なく、一人で、自分の肩を抱く。それくらい、怖い。怖くて、逃げ出してしまいたい。

あの時のように。

突然記憶の階段を駆けあがったのは、スノードロップの言葉。

姉を見捨てた卑怯者。

反論なんてできなくて、雨が冷たくて、逃げ出すこともできなくて。

「シギユン」

聞こえたのはあの人の声。姉の恋人で、尊敬に値するハンターであるあの人。

ほんの少しの勇気を振り絞って、目を開ける、顔をあげる、そし

て、あの人の姿を探した。

「ジェイナスさん？」

崩れ、雑多になった荷物の中から、何かを探していた。それが何であるのか、それはすぐに知れた。ジェイナスがまもなく、一振りの大剣を探り出した。

スノードロップとソフィア。二人のハンターに没収されたものである。

牙獣の体毛をふんだんに用いた大剣を背負うと、その顔は、ジェイナスの顔は、とても凛々しく見えた。まだ何も諦めていない顔である。

「君は早くみんなと一緒に逃げるんだ」

その顔は、みんなが逃げていく方向とは反対を向いている。あの古龍の方へと。

このままでは、この人も行ってしまふ。あんなところに。

させられない。させてくれない。そんなこと。

思わず、シギユンはジェイナスに抱きついた。

「無理、ですよ……。あの古龍、とても速いんですよ。ベルキウスが逃げ出すくらい強いんですよ。無理に、決まってるじゃないですか……」

王国が躍起になって隠そうとしたり、まるで異なる姿形をした生き物なんて、村のハンターの手に負える相手であるはずなんてない。

ジェイナスは笑う。こんな時でも、こんな時に。

「ありがとう、シギユン。でも、僕は、やっぱり間違ったことをしていた。フィロソフィアさんは、予防処置だなんて言ってくれたけど、結局、大切な人を守れなかった自分への苛立ちを野生動物にぶつけてただけなんだ。僕は、今から本当の復讐を始めるんだ」

全部、あのスノードロップに言われたこと。あの女がおかしなことを言わなければ、言わなければ、シギユンはジェイナスと一緒に狩りを続けていたことだろう。

それこそ、あの女の言葉通り、思いの人との冒険を楽しんでいたことだろう。

「それに、僕はハンターだから、困っている人のために戦わないからね」

ひどくちっぽけで、惨めな気持ちだった。自分が最低な人間の気がして、そして、それは恐らく正しい。

自分のことしか考えていないことを見透かされて、今でも自分のことしか考えてない。

涙が出た。泣く資格なんて、とてもではないけど持てないのに。

水で汚れた視界は、ジェイナスの困ったような顔を見せつけた。

「実を言うと、ナルシストだなんて言われるかも知れないけど、僕は、君が好意を持ってくれているんじゃないかって、気づいてた。でも、僕はヘスティアのことが好きで、それに、同情と愛は違うものだから」

この人は、優しすぎる。もし、中途半端な優しさを持つ人なら、きっと、何らかの形でシギユンの気持ちに伝えてくれたはずだから。

この人のこんな優しさが好きだった。

優しいから、この人は気持ちに伝えてくれなくて、伝えてくれる程度の優しさならきっと好きにはならなかった。

なんて皮肉なんだろう。まるで、決してこの人とは結ばれないことを暗示しているみたいで。

おかしくて、というよりも、笑うしかなくて、笑った。ジェイナスにすがりついたまま、笑った。ひとしきり笑って、すると、急に気分が塞いでしまう。

「私、村にいました……。ドラギュロスが家に向かって落ちていくのを、見てました」

曇り空をゆつくりと、灰色の甲殻をしたその姿が姉のいる家へと落ちて行くさまを眺めていた。

「でも、私には何もできませんでした。それは、きっと怖かったからです。まだ、私に一人でベルキュロスを狩ることはできませんから」

だから。

「私は、臆病者です！」

振り降ろされるソフィアの大剣。それが、あり得ない音をかき鳴らしたことをスノードロップは耳にした。

それは紛うことない金属音。

クシャルダオラの鱗が、甲殻が打ちつけられる度に発生する音が、金属を叩いた時のそれなのである。

「これが、本当に生物の体かい？ グラビモスが、紙に思えてくるよ！」

再び、頭めがけて剣を振り降ろすソフィア。甲高い音がして、弾かれたも同然の攻撃はソフィアの体勢を崩した。反撃として振るわれた爪を寸前の場所でかわす。

そのことを確認してから、スノードロップは弦を振り絞る。指が痛くなるほど溜、一度に四本の矢を頭めがけて放つ。

やはりと言うべきか、鏃は堅い甲殻をかすかに傷つけただけでそのすべてが弾かれてしまう。

これが古龍。

「お姉様は、それでも！」

打ち破ったのだ。それを、妹であるスノードロップが破れないなどあってはならない。お姉様の名誉を汚すなどあってはならない。

一で駄目なら一〇を。一〇で駄目なら一〇〇でも一〇〇〇でも。

頭。細く短い二対の角の根本を集中的に狙う。ソフィアの大剣と合わせても、わずかに切れ込みが入ったかどうかとも疑わしい。

風翔龍クシャルダオラ。またの名を鋼龍と呼ばれることを今更ながら思い出される。ここまで強度が高いのでは鋼の名は単なる比喩ではないらしい。

鋭い爪と鋼の強度を持つ脚が地を踏みつける。赤黒い光が微かに爆ぜて、突進することで、地を踏みつける度、地面が砕け破片が舞う。

狙いはスノードロップ。四本の脚で加速する勢いは、その細く長い体に似合わぬほど力強い。横へと飛び、かわしても肌を焼かれるような感覚。かすかに龍毒が触れたのだろうか。

すべてを腐食させ、劣化させる龍の毒。

そんな話を聞かされて、その威力を浴びてみたいという気にはならない。

飛ぶことに優れた飛竜の中には足腰が弱く、突進の度に体を地面に投げ出すことでしか勢いと止めることができない種が存在する。古龍は違う。四肢でしっかりと地面をとらえ、すぐにでも振り向いてこようとする。

その前に、その先に、スノードロップはその翼めがけて弓を振り絞った。翼膜なら、その柔軟さから矢が通るかもしれない。そんな甘い期待は、思いも寄らない方法で裏切られた。

振り向こうとするクシャルダオラの横顔。その角が微弱な龍毒を纏って赤黒く輝く。それと関係するのか、一陣の風が古龍を中心に吹き荒れる。風は弓を捉えると、その軌道をねじ曲げてしまった。

偶然。それにしてはできすぎで、故意と認めるには滑稽。

古龍は風を操る。そんなことが本当にあるのだろうか。

あるのは確かな答えではなく、冷然なる現実。振り返った古龍は再び突進する。風を纏い、まるでそれ自体が弓のようにまっすぐにスノードロップはかわす。ソフィアはタイミングを大剣の腹を盾にそれを防ごうとする。うまく刃を傾け、力を逃がした。爪の先がかすめた程度であるため、さほど強い衝撃を受けることなくクシャルダオラがソフィアの脇を抜ける。

「反則だよね、古龍ってさ」

ダメージはほとんど入っていないはずのソフィアの嘆き。見ると、固い灰晶蠍の甲殻で作られているはずの大剣に刻まれた一筋の傷。赤い粉を散らしたような跡が浮いていた。

人知を超えた力と、生物を超えた存在と、すべてを憎む毒を持つもの。

それが古龍。

その顔は、まるでこちらをあざ笑っているように口元を歪ませている。

馬鹿げた話だ。侮蔑や侮辱という概念は名誉を知る者の特権である。モンスターが行うようなことでは決してない。

モンスターにも怒りや悲しみといった原初の本能に根付いた感情はあるだろう。しかし、誇りやプライドといった心持ちは人のようなある程度知性を得た生物固有のものである。

飛竜は名誉を重んじなどしない。牙獣は不名誉を理解しない。魚竜が決闘を挑むことなどあるだろうか。

なのに、では何故、古龍は嘲笑う。

鋼を薄くのばした翼を大きく広げ、角が赤く黒く輝く。風が吹き抜ける。ただの風ではない。雨を弾き、合間に赤を縫い合わせた龍の風。

龍風とでも呼ぶべきか。

龍毒とともに放たれた風は、足に吹き付けると弱い痛みが走る。すると、一瞬で力が抜けて強風に吹き付けられるまま体が飛ばされる。

それはソフィアも同じである。踏みとどまることができず、吹き飛ばされる。立っていることができない。弓を持つ手で地面に手を突いて体を支える。

一時弱まった風に前を見ると、そこにクシャルダオラはいなかった。もつと上。見上げると翼を羽ばたかせ、浮いていた。いや、これはもはや飛ぶとしか表現のしようがない。

ベルキュロスのように上昇気流を利用するのとは違う。自ら風を従えて、飛ぶ。

飛べもしない、ちつぽけな人間たちを見下ろして。それとも、見下しているのだろうか。

嘲りを表現する口がゆつくりと、見せつけるように開かれると、また風を感じた。これまではクシャルダオラを中心に放たれていたように感じられた風。それが今は外から内へ。外から口へと流れ込んでいる。

息をたらふく喰らったクシャルダオラの胸が張りつめる。吸い込まれた大気があんな細い胸の中に圧縮されている。膨大に、強靱に、限度を超えて。

クシャルダオラは狙いをスノードロップに絞ったらしい。見上げる視線と見下す眼。

立ち上がるうにも、まだ龍毒の影響が残されているのか、足腰が言うことを聞かない。

吐き出される暴風に木の葉のように吹き飛ばされる自分を想像する。雨とすれ違って吹き上げられるのか。それとも壁に叩きつけられ壁画に彩りを加えることになるだろうか。

お姉さま。

誰よりも強く気高かったあの人のことを思い浮かべて、聞こえたのはスノードロップの名前を呼ぶソフィアの声。

人の影を急速に失っていく谷の合間。身じろぎ一つが、張られたロープを断ち切る。ロープが弾け飛ぶ度、冥雷竜ドラギュロスが自由を獲得していく。

捕獲用麻醉玉の効果はすでに切れた。

まだ傷は完全には言えないが、モンスター固有の高い回復能力は、すでに活動が可能なほどの体力を取り戻させている。

空を飛ぶことに特化したベルキュロスにしてはたくましい両足が力強く地面を掴み、その幅広い体を起きあがらせる。

古龍の声が聞こえる度、首を上を持ち上げ、あたりの様子をうかがう。過剰とも言える警戒心を見せながら、ドラギュロスは歩く。

その先には、人間たちが逃げる際に置き去りにしていった荷物が散乱している。その中、目当てのものを見つける。

モンスターは恐れる。それは、猛毒である故に。人は恐れる。それは未知であるが故に。龍を知るものはこう呼ぶ。龍殺しの実と。それを龍が忌避しているが故に。

樽いっぱいに積み込まれていた龍殺しの赤い実が今は路上に投げ

出されている。赤い実が転がる場所、地面が変色し、明らかな腐食の痕跡を見せていた。

喰らう。ドラギュロスは龍殺しの実へ食らいつくなり、その実を次々に丸飲みにしていく。

その口から、赤黒い果汁を滴らせながら。

吹き飛ばされるよりも一足早く感じた抱き上げられるような感覚。頬を散りきった風が撫でた。背中と膝裏に感じるのは、紅溶岩竜の固い鱗。

「一体、何のつもりですか？」

一体誰がスノードロップのことを抱き上げているのか、わざわざ確認して見る必要はない。

混乱に乗じて逃げ去ったと考えていた。わざわざ古龍に挑む言われなんてないではないか。

「モンスターハンターがすることなんて、一つしかないだろ。モンスターを狩るんだ」

男は、ジェイナスをゆつくりと降ろす。許嫁がいただけのことはあって、女の扱いには慣れているようだ。手つきは優しく、こんな風に女を扱う男を、スノードロップは少なくとも一人知っている。

逃げていればよかったものを。クシャルダオラはその眼にジェイ

ナスの姿を映していた。その眼は見開かれ、まるで、楽しみを邪魔された子どものよう。

我慢できないのだろうか。せつかくの獲物を横取りされたことが許せないのだろうか。ちっばけな人間如きが刃向かってくること

モンスターにとっての怒りとは防衛本能の具現にすぎない。死にたくない。そんな本能が怒りを誘発させる。そのため、追いつめられるほど怒りを露わにする。しかし、古龍は違う。より人間に近いプライドを傷つけられた。腹立たしい。より合理的な人間が手にした論理より導かれる非合理的なロジックがその理由となる。

クシャルダオラは吠えた。吹き荒れる風。龍毒を含んだ龍風も、距離さえあけておけば希釈され、ただの風となる。

風を全身に浴びるのは四人のハンター。スノードロップとソフィア。そして、ジェイナスと、姉を見捨てた卑怯な女。

その目はしっかりと古龍を見据え、太刀を握る手は震えを見せない。

意味がわからない。理解ができない。どうしてシギユンがここにいるのだろうか。

「あなた、どうして？」

「ジェイナスさんが困っている人を助けると言って聞かないからで

す」

横目で見ると、ジェイナスは微笑んでいた。

「邪魔にはならないつもりだよ」

できることなら追い払ってしまいたい。ただ、そこまでの余裕はない。何より、ソフィアが随分と乗り気であった。

「いいね、これでちょうど四人。バランスだって悪くないよ」

二人の大剣が頭を狙い正面から攻める。その間に太刀が側面からクシャルダオラの注意をかき乱す。弓はその合間を縫って攻撃を仕掛ける。

即席のパーティを見下ろして、クシャルダオラは再び大気をその口へと吸い込み始めた。

第七話「孤高の射手と血塗れの恋」（後書き）

ドラギュロスが龍殺しの実を食べるかどうかわかりません。

何故なら、本来ドラギュロスが生息するのは雪山であり、そして雪山で龍殺しの実は採取できないからです。

まあ、峡谷でも出来ませんけど……。

こんな、設定を捏造しながら原作の設定の独自解釈を狙う。それが、私の二次創作の書き方です。

なお、全九話になりそうです。

第八話「孤高の射手と嵐の王」

峡谷に降り続けていた雨は、いまだにやむ気配がない。それどころか、ここ数日で最も強く、ジェイナスにすがりつくシギユンの体に降り注いでいた。

「私、ジェイナスさんのことが好きでした。でも、お姉さんのことを見捨てたくて見捨てたんじゃありません」

雨は涙と混ざり合う。

「私は、怖かったんです」

いくら峡谷で舞雷竜ベルキュロスを狩ったことがあっても、一人でできることなんてない。

家を潰したベルキュロスが飛び去っていく時、シギユンの胸に代わりに飛来したのは喜びや期待ではなかった。姉の心配と何もできなかった自分への怒り。

そして、そのことをジェイナスにも、村の誰かにも告げることができなかった自身の弱さ。

臆病者であることに疑いはない。

それでも。

「でも、ジェイナスさんのそばでなら戦えます。お願いします。私を臆病者でいさせてください。姉を見捨てた卑怯者になるのは嫌で

す！」

姉を見捨てたかったわけではない。歪んだ恋の成就を願った訳ではない。

臆病ではあっても、不名誉な行いをした訳では決してない。臆病者と罵られても仕方ない。それでも、卑怯者と謗られることは耐えられない。

泣きながら答えを待つシギユンの肩に、そつと置かれた手があった。見上げると、雨が瞳を直撃する。そんな雨の向こう側には、いつもの用に微笑んでくれるジェイナスの顔があった。

「一緒に、行こうか？ 別に、僕は君のせいでヘステイアが死んだなんて考えていないよ。でも、これから僕が挑むのはとても恐ろしいものになる。大丈夫かい？」

この人となら戦える。この人の側にならられる。

「はい！」

シギユンが精一杯笑うと、瞳の端から、雨と混ざりあった涙がこぼれて落ちた。

それは鋼と呼ばれた。堅く、しかししなやかでハンターの刃を受け流す。

それは、風を翔ばす。それを中心に巻き起こる風は矢をそらし、

不用意に近づくハンターの足を払う。

それは、すべてを憎み、見下す。体の至るところから発せられる龍毒はただ立っているだけでも大地を朽ちさせ、風に含まれる微弱的なものさえ、濃度によっては人を麻痺させる。

強靱な体はそれ自体が凶器であり、風を纏い空を飛ぶ。そして龍毒は究極の平等であった。それは死のように、すべての命を分け隔てなく蝕んでいく。

「これが古龍……」

ジェイナスはこれまでにない緊張に、鼓動の不必要な高まりを覚えざるを得なかった。

ベルキュロスとは比べ者にならない。大きさで言うなら、広い翼を持つ舞雷竜の方が大きいくらいだろう。

ヴォルガノス亜種で作られた防具は、不思議と龍の毒に耐性があるようだが、爪がかすめる度、刃で受け止める度、装備は劣化していく。

何度も堅い角を打ちつけた剣は、すでに砥石ではどうにもならないほどに刃こぼれしていた。もちろん、対ベルキュロス用に氷属性を纏う大剣では、古龍に対して満足に効果を発揮しない。

牙狼大剣は冷却機構を内蔵しているため、通常の大剣に比べると強度が弱い。もっとも、灰晶蠍の頑強な甲殻を利用した大剣でさえ、爪の痕が赤黒く変色している。

大剣を背負う女性、ソフィアは、嵐の中でさえ通るしつかりとした声を出した。

「みんな、無理はしないで。討伐する必要なんてないんだ」

その体を包む灰晶蠍の防具は、棘状の部位など弱いところから破損がすでに始まっている。それでも笑っていられるのは、この人の人としての強さなのだろう。

果たして、古龍は人語を理解するのだろうか。

舐めるな。

まるでそんな言葉を発しているように目を血走らせ、地に足をつけたまま口を大きく天へと開く。すると、雨が歪んだ。

膨大に吸い込まれた大気が風を起こし、重力に引かれて落ちる雨の素直さを許さず、横殴りの雨が吹く。

これまでに幾度となく見せた気弾の放射。これと同じことをするモンスターを、ジェイナスは知っている。

響狼オルガロム。生涯を添い遂げ、伴侶の死に嘆きさえ見せる牙獣種は、クシャルダオラとは反対の意味で人間くささを持っていた。

「オルガロムと同じだ。空気を圧縮して……、それを、吐き出して……」

「圧縮率は比べものにならないけどね」

たまたま近くにいたスノードロップが、言葉を続けた。ソフィアに比べると聞き取りづらいが、それでも女性特有の高い声は雑音の中よく通る。時折女性が羨ましくなる瞬間だ。

「文字通り鋼の体がそれを助けているのでしょうか。魚竜種ガノトトスも理屈としては同じですが、威力が桁違いです」

ガノトトスの場合は水。貯水袋に貯めた水を圧縮し、勢いよく飛ばす。強靱な肺活量のなせる技である。

クシャルダオラも同じことなのだろう。同じように空気を貯め、圧縮し、通常の生物なら破裂してしまうほどの気圧になってもまだ圧縮する。外が鋼なら内も強靱。

信じられないほどに圧縮された空気の塊だ。放たれば、一気に解放されれば気団は元の体積に戻ろうと異常な速度で広がるようになる。それこそ、人を消し飛ばしてしまうほどの速さで。

古龍が前足で地面を叩き、上体を仰け反らせる。これが、発射の前動作。

回避が早すぎても狙いを動かされてしまう。回避は攻撃される寸前。

三人のハンターは誰が合図を出すこともなく、射線上から各のやり方で移動する。

文字通り空を切る気弾は地面をえぐり、雨を徒に痛めつけながら岩さえ砕く。

すべてが異常で、すべてが異質。そして、すべてが規格外。それが、古龍。

太刀は、何においても中途半端な性能を有する武器である。一撃の威力は大剣には及ばない。動きの素早さでは片手剣に溝を開けられる。

唯一の利点は扱い安さだが、それだとて、大きなアドバンテージを約束してくれるわけではない。

シギユンは足を狙うつもりでいた。古龍の後ろ足。強度が弱いとは思わないが、どんな生物も足で立っている以上、ここを痛めつければ動きを鈍らせることができるからだ。

しかし、太刀はピンポイントの狙いというものを大変苦手としている。刀身が細く軽いため、大剣以上に大仰に、体の勢いをつけて振り切らなければ威力が乗らないからだ。

シギユンは太刀を構え、自分自身が飛び上がるような気持ちで太刀を頭上に持ち上げ、そのまま降り降ろす。

すると、後ろ足を狙ったつもりが、翼にぶつかり、軌跡をねじ曲げられてしまう。構わず、気刃斬りを狙う。

気刃斬り。特殊な呼吸法で、一息に五度の剣撃を繰り出す技である。大剣では呼吸が持たず、片手剣はそんなことをするまでもない。よって太刀のみが使用するこの技は、左右から勢いよく2度切りつけ、そして、最後にすべての息を使い切ることで一気に振り降ろす。

手に伝わるのは堅い感触。十分な手応えというものは、まるでなかった。

太刀は広い範囲を振り回すことで刃に勢いを乗せる。そのため、奥まった部位を攻撃しようとしても、ほかの部位に触れてしまうことで勢いを削がれ、目的の部位に達しないということがよくあるのだ。

反対に言えば、手数をばらまいてモンスターの失血死を狙うという戦い方が基本になるため、大剣のように目的とする箇所を正確に狙い撃てる技術が必要としない。

駆け出しのハンターの多くが太刀を好む理由である。

シギユンも、ジェイナスと同じ大剣を、選ばなかったのではなく選ぶことができなかった。

気刃斬りを終えると、使い果たした息が体に重くのしかかる。

太刀のもう一つの弱点。それは、刃に勢いを乗せようとするあまり、攻撃後の隙が大剣以上に存在してしまうことである。

側面とは言え、刃を振り回し続けた。クシャルダオラが、シギユンに興味を持ってしまったらしい。首を回して自らの横を眺めると、その眼がシギユンを捉え、シギユンもまた、視線をつい合わせてしまった。

人より確実に大きくて丸い、淀んだ緑の瞳に射竦められると、シギユンは思わず体を強ばらせてしまった。

怯えたくなんてない。怖がりたくなんてない。それでも、体はすぐには言うことを聞いてくれない。フルフルの弾力性に富む皮が易々と斬り裂かれる様を想像して、爪が自分の体に深く食い込む痛みが思い浮かぶ。

クシャルダオラは身を捻ると、体を大きく回し、爪を振り上げた。かわせない。嫌な確信がよぎる。

激しい雨音の中、鋭い音が数条聞こえた。矢がちょうど古龍の目のあたりに命中し、かすかにそれ狙いは、爪をシギユンの頭上を通過させるにとどめてくれた。

急いで場所を離れる。

どうやら、スノードロップが助けてくれたらしい。ハンターとしての腕は確か。それでも、あんな言い方をしなくてもいい気がする。胸に秘めていた——気づかれていたとは言え——恋心をよりにもよってジェイナスの前で暴露され、卑怯者と決めつけられた。

この狩りが終わったら、絶対に文句の一つでも言ってやりたい。ハンターとしてではなくて、1人の女性として。

それとも、狩り場でハンターであることを忘れたことで、狩りの神様——そんなものがあるとすればだが——が怒ったのだろうか。

雷鳴よりも轟いて、飛竜の鳴き声がした。

ここは両脇を崖に囲まれた細長い一帯であるため、よく声が響く。

誰もが、古龍さえも声の主を捜して、上を見上げた。

灰色の甲殻。それが、今は赤黒い雷に帯電している。龍毒を纏う翼を広げながら、冥雷竜ドラギュロスが嵐の空の中、峡谷の風を受けてゆっくりと降りていた。

「ドラギュロス……」

思わずその名を口ずさむ。

「こんな時に！」

スノードロップは憎々しげに声を荒げた。

「覚悟の決め時かな？ 縁起でもないけどね」

ソフィアが、離れた場所でこんな言葉を漏らしていた。見える顔は雨に濡れ、単なる雨水でしかない滴が、まるで冷や汗のように見えていた。

命は、必ず道を見つけたず。

草木があった。それは徒に葉をはむ獣に怯え、その生産物を搾取されるだけの存在であった。ところが、草花はただ堪え忍ぶ存在ではなかった。

ある日、一本の樹木が獣にとっての毒を持ったのである。するとどうなるか。

獣はわざわざ毒のある葉を食べようとはしない。すると、その樹は栄養を蓄え、より多くの子孫を残す。そして、子孫の中からも、毒をもつ樹が誕生する。その子孫もまた、効率的に子孫を残し、一本の樹から始まった抵抗は、やがて種全体に広がることでその種を新たな段階へと押し進めた。

毒を持ったことは偶然でしかなかった。神の気まぐれで生まれてくる変異体。それが偶然獣への抵抗する力を持ち、そして必然として種にそれが伝播していった。

人はこれをこう呼んだ。環境への適応を進歩と置き換え、体を化えていく過程。

そう、進化と。

ドラギュロスは理解などしていなかった。自分という存在が持つ意味も、自分がすべきことの意義も。

それでも理解していた。古龍は敵である。抗わなければならない敵である。

クシャルダオラはベルキュロスを捕食する。峡谷の食物連鎖の頂点にあるのはベルキュロスである。しかし、古龍はふらりと峡谷を訪れる。

どこから来るかなど、舞雷竜の知ったことではない。理解しているのはこれが天敵であるという事実。

古龍が訪れる度仲間が殺され、過度に捕食者を失った峡谷ではその度に草食種が過剰に繁殖し、草木を食い荒らした。生態系に甚大な被害がもたらされてきた。

何より、ベルキュロスにとって、打ち払わなければならない、敵である。

これは風を操り、峡谷の風を頼りに飛行するベルキュロスをたやすく地へと墮とした。その強固な体皮は傷つけることさえできなかった。

もう誰も知らない昔、風に頼らず、より地上で活動することに適した個体が生まれた。

このことの意味をベルキュロスたちは知らない。知らずとも、種としての総力を上げて、これを守った。古龍の執拗な攻撃から。

その子孫の中から、やがて灰色の甲殻と、そして龍毒を含有する実を利用する個体が現れた。

古龍は執拗に狙い続けた。この個体の存在する意義を知っているかのように。

古龍は睨む。龍毒を纏う舞雷竜を。

冥雷竜は見つめる。捕食者としてベルキュロスという種を蹂躪し続けた天敵を。

互いが威嚇しあい、獣の叫び声が峡谷に木霊する。

適者生存。赤の女王仮説。人が理屈として理解することを、生きるといふ本能、食らうという殺意で確かめ合う獣の声が響く。

「これはこれは、どうしたことだろうね」

ソフィアは、どうにも締まりのない声を出すしかなかった。

通常、大型種が同じ区画に現れる場合、それはすでにある種の共生関係が成り立っているのか、同種であることが大半である。よって、どちらの場合でも、モンスター同士の間に関係がある程度築かれていることが常である。

ところが、目の前の二頭は違う。会敵するなり、ハンターのことなんてそっちのけで戦いを初めてしまった。

ドラギュロスが漆黒の雷球を複数吐き出すと、かわし損ねたクシヤルダオラの甲殻が赤黒く爆ぜて、苦痛にうめいた。

「あのベルキュロスは、わかってるんじゃないかな？ クシヤルダオラが倒さなければならぬ敵だってこと」

ジェイナスの素直は言葉。この素朴な青年の言葉に、スノードロップは真っ向から反対した。

「モンスターが、そんなことを理解できるとは思えません」

ソフィアは、どちらかと言えばジェイナスの説を支持していた。

そちらの方が面白そうだからだ。

「君だつて言つてたじゃないか。このベルキュロスが仮に対古龍を想定して龍毒を得たのだとすれば、それは進化の可能性、新たな姿の模索だよ」

「それはそうかもしれませんが、しかし、その実が毒を持つのなら、避けて別の実を食べればいいだけのこと」

クシャルダオラがわざわざ灰色のベルキュロスを襲う意味はない。危険なだけであるからだ。

基本的に、捕食者とは驚くほど臆病な生き物である。ここで無理をして怪我をして、以後の狩りができなくなるような危険を犯すことはまずない。それなら、今の機会を逃してでも次を待ち、そして抵抗できない弱い子どもを優先的に付け狙う。

臆病で姑息。それこそが捕食者の姿である。

「それじゃあ、相対的に龍毒を持つベルキュロスの割合が増えてしまっじゃないか。まあ、それこそが進化の道筋なんだけどね」

「じゃあ、クシャルダオラは、ベルキュロスを進化させないために、ドラギュロスを襲っているということかい？」

ジェイナスの言葉の中から拾い上げたのは、ドラギュロスという聞き慣れない言葉。

「ドラギュロス？ まあいいや。そう考えてみるとおもしろくないかな？」

きつと姉であるフィロソフィアが教えたのだろっ。ベルキュロス亜種、その名はドラギュロス。

「でも、モンスターさんがそんなこと考えるでしょうか？」

「古龍は僕たちの常識を外れている。人どころか飛竜種でさえ住み着けないような極地に暮らして、その操る能力は人知を軽く超越してるんだ。それに、骨格構造なんて意味がわからない」

古龍の生息が確認されている場所に人が迷い込まないのは、人が入ることができない場所だからだ。真夏でさえ氷点下を脱出することのない極寒の地。大量のマグマが吹き出し続ける活火山。あるいは、酸素に乏しいもつとも天に近い山々。とても、生物が生きるには適していない場所を、古龍は選んで生息する。

そして、王国が知る限り、古龍は他にも炎を操る者もいれば、光をねじ曲げ姿を完全に隠してしまう者もいる。

人も飛竜も同じ生物から派生したとされるイヴ仮説では、背骨を持ち、四肢を備える生物以外の生物の存在を説明できない。

まさに学者泣かせ。定説を根底から覆してしまうっ。

常識なんて、根本から通用していないのだ。

皆が黙って考え込んでしまったほどよいタイミングで、ソフィアは一つの提案をした。

「さて、じゃあ、ドラギュロスだっけ？ あの子を援護しようっ」

「あなたは何を!？」

一番いい反応で食いついてくれたスノードロップの口元に立てた人差し指をかざす。聞き分けのいいスノードロップはそれだけで発言権を譲ってくれた。

「いや、その方がいいよ。古龍を僕たちだけで撃退できる保障なんてないし、それに、飛竜と肩を並べて戦えるなんて滅多にない体験だよ」

「いいんですか、ジェイナスさん？」

困惑したシギユンはジェイナスの顔色をうかがっている。もっとも、ジェイナスの方は乗り気であるようで、すでにその目は争う二頭の獣たちへと向いている。

それは、奇妙な光景であった。ドラギュロスを中心として、ハンターが古龍を取り囲む。

まずどこから指摘しようか。

古龍なんてお伽話の存在が闊歩していること。それとも灰色のベルキュロスが存在しているということ。もしくは、人と飛竜が共に戦っていることだろうか。

「こっちです!」

シギユンがクシャルダオラの尻尾に斬りつける。注意を後ろに反らされた古龍が首を曲げると、そこへソフィアが正面から近づいた。振り降ろす大剣。それは、ドラギュロスの放った龍毒にあてられ、赤黒い傷を抱く角へと正確に衝突する。

確かに堅い。しかし、かつてない手応えを、ソフィアは確信した。

「よし、いいペースだよ！」

クシャルダオラは爪を左右に振り回し暴れ回る。剣士では近づくことができない。しかし、ガンナーなら話は別である。

「自分の思い通りにならないと許せない。まとわりつかれるのがうざったい。本当に、子どものようですね」

スノードロップは冷静に弓を振り絞った。狙いは腹部。ドラギュロスの雷球が直撃し、そこは赤黒い痕跡に蝕まれていた。勢いよく突き刺さってくれる訳ではないが、金属音はなく、ほどよく勢いが伝わったように矢は鈍い弾かれ方をした。

痛むのだろう。うめくクシャルダオラ。

ドラギュロスが動く。飛び上がった。そう誰もが考えた。しかし、2本の違和感。ドラギュロスの左右の翼から伸びる鉤爪が、まるで錨のように地面に突き刺さっていた。

そして、鉤爪で勢いをつけ、一気に降下する。大地を走り回ることとを可能とした強靱な足腰がクシャルダオラの翼を踏みつけ、さすがの古龍もたまらず腹を抜かるんだ地面に擦りつけた。

足腰のバネでドラギュロスを持ち上げるクシャルダオラ。冥雷竜ははじめから、これ以上古龍の上に乗っているつもりなどなかった。

ちょうどクシャルダオラの斜め上の位置に飛ぶ。そして、翼を大きく傾けた。

「ドラギュロス、頭を狙うんだ！」

ジェイナスの言葉を、まるで聞いているかのように、ドラギュロスは鉤爪を薙ぎ払う。人が視覚できるぎりぎりの速度で黒い雷が古龍の頭を撫でる。

さすがにこれは効いたのか、クシャルダオラは苦痛の声を上げながら体を起こすと、そのまま支えることができずに体を横倒しにして暴れていた。

攻撃が確実に効果を上げていた。しかし、誰もただのたうつだけのクシャルダオラに攻撃しようとするものはいない。古龍はまだまだその恐ろしさを寸毫も減じてはいない。次第に痛みも引いてきたのか、次第に動きが落ち着いてくる。

クシャルダオラは、ゆっくりと起き上がる。龍毒に浮かされた甲殻は金属光沢をくすませ、赤黒い痕跡を点在させている。ハンターによって幾度となく繰り返された攻撃は、かすかながらも確実な傷を与えていた。

それでもなお、ハンターたちは確信していた。戦いはまだまだ続くのだと。

「いよいよ本気にさせたかな？」

ソフィアの言葉を証明するように、クシャルダオラは暴風を纏い、その体を浮き上がらせた。ベルキユロス以外の飛竜種では維持できないほど低い高度を漂いながら、しかし安定している。ただ飛べるという行動自体でさえ、古龍は常識というものに一切の追従を見せることはない。

第九話「孤高の射手と真実の敵」

古龍が空を飛ぶ。その動きは信じられないほど軽く速い。翼を水平に広げたかと思うと、あり得ないことに地面と平行する角度で突進したのである。

龍毒が風に流れだし、空気が赤黒く染まる。

この突進をともに受けたのはドラギュロスであった。飛竜種の中では比較的体重の軽いベルキュロスはふわりと浮き上がると突進の衝撃をともに浴び、そのまま壁へと叩きつけられた。

「ドラギュロスさん！」

つい叫んだのはシギユン。すると、古龍は続いてシギユンに狙いを定めた。低空を飛行しながら、ふと羽ばたきをやめ地面に足を突き刺すように鋭く降下する。すると、再び飛び上がる。この繰り返しである。

太刀を納めたシギユンは一度、二度となんとか逃げきることができたが、最後である三度目は、体を前に大きく投げ出すことで辛うじてかわすことができただけだった。

かすめた爪が、フルフルの皮で作られた防具に一筋の線を刻んでいた。

ハンターたちの攻撃を受けながら、ドラギュロスの龍毒を浴びながらもクシャルダオラはなお健在であった。

飛びながら、再び大気をその頑強な胸へと集結させる。地面へと体を左右に振りながら風を吹き付けると、地面が扇状に削られてしまった。

今度狙われていたジェイナスは、うまくクシャルダオラの足下へと逃れていたため、傷を負ってはいない。

注意が他のハンターへと向いている隙を見計らって、倒れるドラギュロスに近づいたのはスノードロップであった。

傷の具合を見定めようとするよ、傷よりもより深刻な事態が発生していることに、スノードロップは気づいた。

ドラギュロスの灰色の甲殻。それが、劣化していた。弱い火で炙ったように白く、少し擦れば表面が剥がれ落ちてしまうのではないだろうか。

原因は明白である。

「龍毒……」

あらゆるものを腐食させる毒が、ドラギュロスなら例外とはしてくれていないらしい。纏う赤黒い光が、少しずつドラギュロスを蝕んでいる。

ドラギュロスが突然雷球を吐き出した。それは攻撃というよりも嘔吐に近い。その体に過剰に発生した龍毒を吐き捨てているのだろう。龍毒は、やはり生物にとって有害以外の何者でもない。

しかし、不思議なもので、目が口ほどにものを言うとは、人間に

ばかり当てはまるものではないようだ。

ドラギュロスの目は、死んでなどいない。クシャルダオラを見つめたまま、ゆっくりと立ち上がろうとする。

この様子に、ソフィアも気づいた。ドラギュロスが何かをしようとしている。

「みんな、時間を稼ぐんだ！」

雨音を押し退けるソフィアの声。ハンターたちは今一度武器を構えなおした。

ジェイナスが浮遊する古龍の足を狙って大剣を振り降ろす。すると、クシャルダオラは軽いステップで横へと体をずらした。

シギユンが尻尾を狙い、太刀を突き出した。少し体の向きを変えただけで、その刃は届かない。

そして、クシャルダオラは体を地に擦りつけるように回転させ、その爪が地表をさらう。狙われたのはジェイナスであり、大剣の腹で防いだ。

飛び散る、響狼の体毛。

信じられないことではあったが、対モンスター用に作製された武器が、あまりに速く破損している。このままでは持たない。

ハンターたちの視線は、立ち上がったドラギュロスへと集中する。そして、クシャルダオラの意識もまた。

ハンターはわからずとも理解していた。ドラギュロスに託すほかないのだと。そして、クシャルダオラが、そのことに気づいたということにも。

シギユンの太刀を握る手に、自然と力がこもる。ここが正念場。それでも恐怖がふとわいて、ジェイナスの姿を捜し求めた。

すると、分厚い雨の先、ジェイナスはドラギュロスを守るような位置で大剣を構えていた。あの人は諦めてなんかいない。そして、そうである限りは、シギユンも諦めないでいられる。

「こつちだ！」

声を張り上げて古龍の注意を引いたソフィアはドラギュロスから離れた位置に誘導を試みている。

素早いクシャルダオラは一瞬で飛びかかると、手足の鋭い爪でソフィアを襲った。大剣を盾にするも、放たれた龍毒が灰晶蠍の甲殻を蝕み、刃の一部が砕けて落ちた。

そして、弾き飛ばされるソフィア。重傷を負ったようには見えないことが幸いである。何故なら、今、助けに行っている余裕はない。

クシャルダオラが振り向いた。まださきほどの攻撃から回復しきれていないドラギュロスへと。

間にはジェイナス。そしてシギユンしかない。

古龍の鋭い眼光がシギユンを射抜き、そのまま後ろへと貫通していく。

きっと、クシャルダオラはシギユンのことなど問題にもしていない。本当は怖くて仕方がない。

臆病者と呼ばれる覚悟はあっても、卑怯者と罵られるほど落ちぶれてはいない。ここで逃げれば、自分はまた卑怯者になってしまう。大切な人を見捨てたことになってしまう。

太刀を構えた。

雨の音など聞こえない。風の息吹は耳に届かない。まるで自分が太刀そのものになってしまったかのように、シギユンの心は研ぎ澄まされていた。

相手の動きを読む。来るのは滑空。狙いは後ろ足。シギユンが執拗に狙い続けた後ろ足である。ただ一点、ドラギュロスの龍毒に触れ、朽ちた場所がある。

クシャルダオラは、シギユンのことなど構うことなく滑空する。

太刀には、ほかの武器にはできない唯一のことがある。それは切り払い。武器を振るう反動を利用し、後ろへと下がる斬り方である。攻撃と回避を同時に兼ねる太刀にのみ許された剣技。

これで、古龍を落とす。

刃を斜めに、体を横に、刀を薙ぐ。

後ろへと下がった体が滑空の射線上から辛うじてシギユンの体を逃がし、刃が前足の爪をかすめて赤黒い傷が刻まれた。

そして、鎌形をした刃の先端が、後ろ足、龍毒によって腐食した部位へと突き刺さった。

すぐさま感じるのは刃ごと太刀が引つ張られる感覚。しかし、それはすぐに消失する。鎌の刃が根本から砕け、古龍に近づきすぎたシギユンを龍毒の風が襲う。

息が苦しい。体から力が抜け落ち、太刀が自然と手から放れた。立っていることもできず、前のめりに体が倒れていく。

それでもいい。何故なら、シギユンの目には、後ろ足を傷つけられた痛みで体勢を崩したクシャルダオラが、地面に叩きつけられる様がしっかりと見えていたのだから。

やっぱり、シギユンはすごい。もしも、この少女に力がなかったとしたら、ジェイナスはきっと峡谷に一人で行くと決めただろう。古龍との戦いに連れていくとは思わなかっただろう。

古龍の動きを見切るほどの実力があって、ほんの少し怖がりでも立たない。

でも、シギユンはそのすべての勇気を見せてくれた。

ジェイナスの前、シギユンの手によって叩き落とされた古龍が慣

性のまま、雨に濡れた地面を滑っていた。勢いはほとんど減ることなく、ジェイナスへと向かってくる。

「止めて、みせる！！」

大剣を地面に突き立てる。足はやや後ろを踏みしめ、衝撃に備える。

クシャルダオラは、人でいうところの肩の部分で牙狼大剣へと衝突した。濡れた地面は滑りやすい。ジェイナスは一度で受け止めようとはせずに、後ろへと滑りながら受け止めようとする。

突き立てられた剣が峡谷に轍を刻み、弾ける龍毒が大地を砕く。

筋肉が悲鳴を上げて、大剣が軋む。龍毒が、ジェイナスと大剣の両方を蝕んでいるのだ。そして、先に限界を迎えたのは大剣の方であつた。中腹から砕け、支えをなくしたジェイナスは弾き飛ばされた。

そして、瞬間の光が峡谷に満ちた。

閃光玉の使い方はお姉さまから教わつた。いつも懷に忍ばせ、いつでも思いの場所へと投げることができる。

古龍も目の構造は人間やモンスターと大差ないらしく、ジェイナスを弾き飛ばしたクシャルダオラは視力を失ってその場に留まっていた。

通常ならば三〇秒ほど効果がもつ。時間を計るために、姉から教わった口笛を口ずさみ始めると、サビに入る前に視力が回復してしまったらしい。一〇秒も経っていない。

古龍というのは何をさせても憎たらしい。

視力を回復した証として首を左右に振っている。回復した目で、最初に目にしたのはスノードロップの姿であった。

まさか、閃光玉を投げた相手を探してたのではないだろうが。

スノードロップはうつすらと笑みを浮かべて視線に目を合わせる。

「時間切れです。もちろん、あなたの」

たとえ数秒でも、ジェイナスはすでに離れている。ソフィアとシギユンははじめから範囲の中にいない。

そう、今、クシャルダオラの周りには降り注ぐ雨以外の何者もない。

本当に人間じみている。クシャルダオラはスノードロップの様子を察したように瞳孔を拡散させた。人で言うところの驚愕。そして、首を上に向け、はるかな高見を見上げた。

「ご名答。」

そこには、体毛を赤く染め上げたドラギュロスが眼下のクシャルダオラに狙いを定めていた。ベルキュロスが怒りを示す際、体毛が鮮やかな赤に染まる。そして、ベルキュロスを狩る者ならば誰しも

が恐れる攻撃を繰り出すのが常である。

上空からの急降下攻撃。大気を裂いて、雨粒を追い越し、ドラギュロスは墮天する。全身から放たれる龍毒が雷鳴の如き轟音を発し、黒い光がその強度を増す。ドラギュロスがクシャルダオラを踏みつけようとしていた。わかったのはここまでである。

その次の瞬間に、雷が生えた。龍毒の発する赤黒い雷が地を一斉に這うとともに立ち上り、サークル状に剛雷が暴れ狂う。

雷よりもなお強力な龍毒は、それでも雷と同じくすぐにそれは虚空に染み込むように消える。

跡には、丸く腐食され尽くした地面と、立ち上る蒸気。その中心に立つドラギュロス。龍毒の大半を放出しきってしまったのか、すでに体を包んでいた光は弱まっている。

まさに必殺の一撃を放ったのだ。残された力など微々たるものであろう。

クシャルダオラはドラギュロスの足の下で全身に赤みがさした姿をさらしていた。まるで、金属が錆びてしまったような赤褐色である。口はだらしなく開かれ、身動き一つない。

「すごい威力だね」

腹部を押さえるジェイナス。古龍の突進を受けても話すことができるなら、特に問題はないだろう。

「大丈夫？」

それでも、つい声をかえてしまった。柄でもない。だから罰が当たったのだろう。

仮面をつけたジェイナスの顔が見えたかと思うと、すぐに見えなくなってしまう。

まるで火竜リオレウスの突進を浴びたような痛みがわき腹に走り、体には浮遊感。首が激しく動かされる痛みに気が遠のいていく。訓練によって培った、頭を守るために反射的に体を丸める動きが自然とできた頃、水を染み込ませた地面がクッションとなってスノードロップを受け止めた。

女性が一人、目の前からいなくなることを経験した。抽象的な意味でも、そして、目の前の現実でも。

自分を気遣ってくれるスノードロップの言葉に振り向こうとした途端に、一陣の風が吹いた。

そして、吹き飛ばされるスノードロップ。

視界の隅では、不自然に浮き上がるドラギュロスの姿があった。クシャルダオラが放った気弾がドラギュロスを吹き飛ばし、その余波がスノードロップを襲ったのだ。

ドラギュロスが壁に叩きつけられ、瓦礫を巻き込みながら倒れ落ち、動かなくなる。

雨に混ざって赤黒い光が落ちてくる。それは、折れたドラギュロスの角であった。先端は鋭く、剣と見まがうほどに立派な大きさの角は龍毒を含んだまま、ジェイナスのすぐ傍へと突き刺さる。

呆然と眺めているしかないジェイナスの前で、クシャルダオラが起きあがる。全身が火傷を負ったように焦げているのに、古龍の生命力は生物としての度を超している。

「まだ、動けるなんて……」

動ける。それどころか、クシャルダオラは一気に上空へと飛翔した。ベルキュロスに慣れているジェイナスにさえ、この飛行速度は異常に映った。

逃げるのではない。

嵐を司る暴君は嵐の空に留まると、これまでと同じように口を開き、大気を貪り始める。

風を感じた。嵐のせいだけではない。雨粒がクシャルダオラに殺到する。

クシャルダオラが大気を吸い込みすぎてるため、足りなくなっただ気を補うように周囲から風が集まってきているのだ。

「風が……」

一体どれほどの大気をその胸に集めるのか、いや、集めることができるのか。単なる空気とは言え、圧縮されれば十分な破壊力を持つ。

それがここまで極端に集められたとしたら、もはや災害である。
峡谷の地形が変わってしまう。

「これは無茶苦茶だね。まるで気圧の落とし穴のようなじゃないか……」

大きく破損した大剣を杖のように使いながら、ソフィアがすぐ近くにまで来ていた。

ソフィアの言葉を借りるなら、クシャルダオラが大気をかき乱し、局所的な低気圧を生み出すことで嵐がそこに引き込まれてしまうのだらう。

クシャルダオラが嵐を起こすまではいかなくとも、風の古龍行くところに嵐がついてくる。

「嵐を、従えてるわけですね……」

シギユンの手には、鎌型の太刀ながら、反り返った刃の根本から砕けてしまったため、実質、柄の部分しか残されていない太刀があった。

そして、ジェイナスの大剣は砕け、刃は深々と地面に突き刺さっている。

もうドラギュロスは戦えない。

万策尽きてなお、クシャルダオラはその怒りを鎮めようとはしない。

雷が鳴り響く。雨が勢いを増す。風は吹き荒れていた。

天から、嵐そのものが落ちてこようとしていた。

最終話「孤高の射手と雨の終わり」(前書き)

一〇〇〇〇字超えです。

最終話「孤高の射手と雨の終わり」

空が落ちてくる。

吹き飛ばされたことで、スノードロップは指一本を動かすことにさえ、重い鉛を張り付けたような倦怠感を覚えていた。

うつ伏せに寝ていると、雨が目に直接入る。体を無理にでも起こして、しかし、立ち上がることはできない。座り込んだ姿勢のまま、見上げる空は黒雲と稲光。鋼の光沢を返す古龍の姿。

風が空へと向かい、膨大な量の大気が風翔龍クシャルダオラの口へと吸い込まれているのだ。

耳が痛む。内耳に残された気圧と、急速に低下していく外気との圧力差が鼓膜を押していた。決して強い痛みではないが、重要な感覚器官である耳を汚染されることは不愉快以外の何者でもない。

しかし、それでもなお大気圧は下がり続け、このままでは体内の圧力で体が破裂してしまうのではないか、そんな馬鹿げた空想さえしてしまう。

今、この場所で、自然は大きくバランスを欠いていた。本来一気圧の圧力がすべてのものをあらゆる角度から押している。それは言うならば実力伯仲の腕相撲のようなものだ。もし、どちらかが急に力を抜いたとしたら、果たして何が起きるだろうか。

魔女の一人として、幼少の頃から鍛えられた耳が、その答えを聞き分けた。

地の底から何かが這い出てくる。

「何かに掴まって！ 速く！」

峡谷には、いつも風が吹いている。それは狭い谷間を抜けると、定期的な突風となり人が立ってられないほどの風速にもなる。かと思えば、岩の透き間から地面に吸い込まれた風が、長い通路を通り抜けて、遠く離れた裂け目から、やはり人を吹き飛ばすほどの間欠風という言うべき上昇気流を生み出すこともある。

峡谷とは風と水に洗われる大地であり、狭い谷の底に広がるのは、平らな堅い地面である。

水はけが悪く、窪地にはすぐに水たまりができるが、吸収されなかった水はすぐに濁流となって地をさらう。植物はまばらにしか育たず、赤茶けた地面ばかりが目立つ。

このような場所を生活の場所にしたものがある。

一人はムー文明の人々。住み慣れた砂漠を離れ、過酷な環境の峡谷を選んだ。

一人は舞雷竜ベルキュロス。風をその広い翼に受け、飛竜種の中でも破格の飛行能力を有している。

そして、それ以外の何か。

鋼龍クシャルダオラは困惑していた。

突然、眼下の岩という岩の透き間から膨大な量の霧が吹き出したのである。白い霧は広い範囲に渡って谷を包み込み、不愉快な獲物たちの姿を覆い隠してしまったのである。

これでは狙いを定めることができない。

膨大にため込んだ大気を、クシャルダオラは幾度かに分けて発射した。

空気の塊は霧を突き抜け、地面に着弾する度に岩の砕ける音、崖の崩れる音が響く。これを五回ほど繰り返した時だろうか、胸にため込んだ空気は空になっていた。

しかし、霧は晴れない。この霧は、何かが違っていた。

粘性が高く、まとわりつくように居座り続ける。気弾を撃ち込んだ時、一瞬は晴れても、すぐにその傷を塞いでしまう。

何とも不愉快であった。獲物が吹き飛ぶ様を見ることができないばかりか、自分がもたらした破壊の痕跡を眺めることもできないのである。

クシャルダオラはゆっくりと地面を目指して降下を開始した。すぐに霧がまとわりついてくるが、問題ではない。角に意識を集中し、赤黒い光がそこから放たれると、風が古龍を取り巻いた。

どうして風を操ることができるのか、古龍は知らない。知る意味などなかった。人が何故歩くことができるのかと問われれば、それは足があるからと答えるだろう。では、何故足があるのかと問われれば、生まれた時からついていた。そんな要領を得ない答えに終始せざるを得ないように、クシャルダオラにとつても同じこと。

角があり、それが風を操ることができる。それだけのことなのだ。

風を纏うと、斬り裂かれた霧が道を譲る。風を操ることができる限られた範囲を示すように霧は丸い断面を見せ、その周りを未練がましく渦巻いていた。

やがて、後ろ足をつけ、前足をおき、クシャルダオラは霧の向こう側を見つめる。

さて、どうしたものか。古龍の心は、獲物にどんなとどめを刺してやろうか、そんな残酷なもので満たされていた。

霧の中から一匹ずつ見つけたして、血を味わいながら噛み殺してもいい。爪で引き裂いても、奴らは抵抗さえできないだろう。

毒を持つ獲物はすでに身動きできないだろう。小さな獲物の妙な爪を割ってしまった。どちらにしろ、何もできはしない。

決めた。息を吸い込んで、でたらめに気弾を撃ち込むとしよう。これが当たるかもしれない。当たらないかもしれない。どちらでもいいことだ。

そう、クシャルダオラは息を吸い込み始めた。

すると、霧がわずかばかりの抵抗を見せた。風の結界の中に、突如としてその一部を突き立ててきたのである。獲物が向こうからやってきてくれた。モンスターにそぐわない、冷酷な笑みを浮かべて、クシャルダオラは反骨心ある霧へと気弾を吹き付けた。

膨大な風圧が霧を剥がすと、それは小さな獲物が持っていたはずの爪であった。砕け散る爪。しかし、獲物の姿はない。

もう一つ。霧が飛び込んでくることを、クシャルダオラは見逃していた。それが、爪とは反対側の離れた位置にあったからである。

それに気づいた頃には、霧はすでに剥がれ落ちていた。赤い、小さな獲物が駆け込んでくる。砕けて折れたはずの、毒を持つ大きな獲物の角を持って。

それは、遊び心のなせる技であったのかもしれない。

ドラギュロスはもう戦えない。スノードロップは体を強く打ちつけ、ジェイナスとシギユンは武器を失っていた。そして、破損したソフィアの剣では古龍の堅い殻を砕くことはできない。

必要だった。人が武器として利用できるほどよい大きさがあった、それでいて古龍にダメージを与えてくれると根拠を与えてくれる何か。

ソフィアが武器を投げ、注意を引く。その隙に、ジェイナスは反対側から駆け出した。その手に、冥雷竜ドラギュロスの折れた角を握りしめて。

クシャルダオラはこちらに気づいた。角の発する龍毒はグローブを通して皮膚に弱い痛みを与えている。

風を突き抜け、災厄と目を向き合わせ、ジェイナスは赤と黒の輝きを示す戦槌を叩き降ろす。

ドラギュロスの龍毒が焼き焦がした、ソフィアとジェイナスが幾度となく斬りつけた、クシャルダオラの角へと、龍毒まとう武器を激突させる。

龍毒の、鼻につく臭いがして、稲光のような一瞬の輝きと、広がる鈍い音。

クシャルダオラの小さな角が根本から折れて、顔を覆っていた甲殻の一部が剥がれて飛んだ。

そして、古龍の周りを取り巻いていた風が霧散し、辺りは霧に包まれる。

雨が天空から穿ち、霧を弱らせる。峡谷の谷を持続的に吹き抜ける風は徐々に霧をかすめ取り、その密度を低下させていた。

徐々に鮮明になる視界の中、クシャルダオラがどれほど深い霧の中からでも見渡せるほどの光を発しながら暴れ回っている。体を崖にぶつけ、こすりつけ、龍毒の光を別の何かに押しつけようとしているのだ。

まるでだだをこねる子どものような仕草で、古龍は崖へと八つ当たりを続けていた。

それを眺めながら、ソフィアは碎かれてしまった大剣を拾い上げた。灰晶蠍の甲殻で作られたそれは、今では柄とわずかな刃しか残されておらず軽い。

「これじゃ片手剣だね」

文字通り、片手で振り回せるほどに軽い。ずいぶんみすばらしくなってしまった剣を、ソフィアはそれでも構えた。

その横には、腹部を抱きしめるように押さえながら、それでも弓を手放そうとしないスノードロップ。

「角が風や龍毒に何らかの作用を及ぼしていたようですね」

もう、今のクシャルダオラに体から発する龍毒を制御することができないのだろう。あふれ出す龍毒に炙られ、それを発散するように崖に体を叩きつけている。もちろん、崖とて龍毒で腐食してしまう。崩れ落ち、その岩はクシャルダオラを飲み込む。

こんなことで死に絶えるような古龍ではない。龍毒の発生が落ち着いたのか、瓦礫の下から起きあがるクシャルダオラの体から、赤黒い光は和らいでいた。

その代わり、体中に岩石にこすられた傷が浮かんでいる。

どちらも、満身創痍であることに変わりない。

「ジェイナスさん、最後までお手伝いします」

ただの棒と化してしまった太刀をしっかりと握りしめるシギユン。ジェイナスは、龍毒にさらされながらも、ドラギユロスの角をハンマーよろしく構えている。

そして、ハンターたちの後ろでは、思いを同じくするようにドラギユロスがその傷だらけの翼を広げていた。

まだ戦うのか。互いが互いに問いかける。

一際強い風が霧を裂き、雨は降りしきる。嵐の中の決闘は、今ここに終わりを迎えた。

風翔龍クシャルダオラが空を見上げたかと思うと、一気に上空へと飛び上がったのである。その姿は瞬く間に嵐の中に消える。

クシャルダオラが去ったのだと、その場の誰もが理解した。雨が弱くなり、風が和らぐ。

「嵐が、遠ざかっていく……」

これは、誰の言葉であっただろうか。戦いの終わりを迎え、張りつめた気が一気に抜けてしまった。スノードロップが腹部を押さえうずくまり、シギユンは腰を抜かしたように座り込んだ。ソフィアが乾いた笑みを浮かべながら崖によりかかっている間、ジェイナスはいまだ龍毒を発している角を取り落としていた。

そして、ドラギユロスはゆっくりと、その体を雨と血と、風と龍毒にさらされ続けた地面へと横たえた。

「すごいじゃない。岩が雨風を遮っていたのね。まさかこんなに完璧な状態で残ってるなんて、感激ね！」

峡谷に響くのはフィロソフィアの嬌声。遺跡発掘隊としては、戦闘で地形そのものが変わってしまった発掘現場の惨状に頭を抱えるほかなかったが、何にも増す偉大な発見には喜びを隠しきれない様子であった。

その隣では、功労者二人が顔に絆創膏を張り付け、包帯を巻き付けた痛々しい姿をさらしていた。防具は身につけておらず、動きやすいラフな格好をしている。

「僕としては古龍の力に今更ながら震えてるよ。一度戦ってわかってたつもりだったのに、これだもんね」

灰晶蠍で統一されたせつかくの一張羅は修復不可能なほどに破壊されてしまった。スノードロップのヒーラーU装備にしても細かな傷が多く、修復なしで戦闘には望めないと、診断されている。

もつとも、目の前の発見に心奪われるフィロソフィアはそんな仲間の様子を気にしてはいない。意気揚々と一枚の図面を広げた。

それは、壁画を写し取った図画である。両脇に古龍と戦う人が描かれ、中央には城。ハイパーボリア文明の遺跡より発見された壁画であり、図面には細かな劣化の跡さえ正確に記載されている。

無論、壁画の中央に砕けて、そこに何が描かれていたのかわから

ないような落剥の跡も描かれている。

「ほら、スノードロップ、これ、あなたのお姉さんが送ってくれたもの」

図面を両脇から覗き込んでいたソフィアとスノードロップの二人。

「ではこれが……」

まるで示し合わせたようにフィロソフィアを含む三人は図面から目の前の壁画を見上げた。

「そう。姫様が望んでいたものそのものよ」

「苦労した甲斐があつたね、スノードロップ」

嬉しそうに微笑むソフィア。ところが、相棒はいつも通り、表情に乏しいまま、しかし明らかに不愉快といった様子で眉をつり上げていた。

ミスカトニツク王国第二王女セントポーリアの話題が出たことが原因であることを、ソフィアは楽に気づくことができた。

「姫様のこと、まだ許せないのかい？」

小さくため息を一つ。もう三年も前の話なのに。

「当然です。あの方は、私から大切な人を奪いました」

姉のことである。スノードロップ出身の里では優れたハンターと

して有名で、古龍の討伐に成功したことのある数少ないハンターでもある。

「別に君のお姉さんは死んだわけじゃないだろ。それどころか、ピンピンして今頃どこかで銃声響きわたらせてるよ」

「死んだ、いえ、殺されたも同然です」

スノードロップは自説を覆すつもりはないらしい。

「あんなに気高くて凜々しかったお姉様が、お姉様が……」

あの時のことを思い出しているのだろう。その顔は徐々に、しかし、明らかにまるで世界の終わりを迎えるかのような悲壮感に包まれていく。

それは、元々姫様のお遊びから始まった。側近として仕えることの決まったハンターにある格好を強要し、それに見合った言動となるよう洗脳紛いの教育をしたのだ。

「お姉様が……、メイド服なんて着て楽しそうで、永遠の十七歳だとか言って七つもサバを読んで平気な女に……！」

冗談抜きで、スノードロップは今にも泣き出しそうな顔をしている。

「まあ、ずいぶんな変わりようだったらしいけど」

「僕たちは昔のあの人を知らないからね」

フィロソフィア、ソフィアの姉妹は顔をつき合わせてうめいた。

あの人が優れたハンターであり、最も姫様の信頼を勝ち得ている人物であることに疑いはない。以前の様子を知らない以上、妹君の嘆きに共感してあげることができないのである。

いつも寡黙なのに、姉のことになると饒舌になるスノードロップ。その視線は壁画の方を向いたまま。早い話が、ソフィアたちのことを見ていないのだ。

「それにしても、君はどうしても顔を合わせてくれないんだね。お姉さんはあんなに愛想がいいのに」

変わり果てた姉のことを言うて欲しくはなかったのだろう。怒りから、スノードロップはついソフィアたちの顔を見て、すぐさま目をそらしてしまった。顔を、赤くして。

「その恥ずかしがり屋な癖、何とかならないのかい？ みんな君のこと誤解してるよ」

スノードロップは、そう、人と目を合わせることができない。

「し、仕方ないじゃありませんか！　だ、だ、だって、村じゃ、人と顔を合わせる機会が少なくて……、それにお姉さまがいつも傍に……」

特殊な環境で育ち、頼りになる姉がいつもいてくれたせいなのだそう。結果として、目を合わせず、合わせようとしても横目で見られるくらいが限界の恥ずかしがり屋ができあがった。

そのせいでスノードロップは普段の寡黙な様子と、それに加えて目を見ない話し方からいつも悪印象をもたれてしまう。姫様側近の六人の中で唯一単独行動が許されていないのも、こんなところが影響している。

ソフィアはもう一度ため息をついた。

「それに、シギユンに言っただけのこと、あれ、君のことだろ」

「ち、違います！ 私はアレスさんのことなんて！」

顔を赤くしたまま、スノードロップはあきらかに狼狽していた。

「誰もアレスのことだなんて言っただけのことと思うけど」

フィロソフィアの指摘を聞くなり硬直する。戦闘中以上に忙しい様子である。

「アレスさんは君のお姉さんの恋人だろ。別に好きになっちゃいけないなんて言うつもりはないけど、振り向いてもらえないイライラを同じ境遇の人にぶつけるのはどうかと思うよ」

目を閉じて、スノードロップはソフィアの方へと向き直った。声は震え、抗議にしては弱い。服に掴みかかる力とて、強いものではない。

「や、やめてください。そんなこと、他の人に聞かれたら、私、私……」

「大丈夫。ここには当事者しかないよ」

軽く涙をためた瞳が瞬きを繰り返した。

「当事者？」

きつと、その目は、ソフィアの後ろにいる二人を捉えたことだろう。今は質素な服を身につけただけの、戦友の姿を。

距離は、声を聞き取ることができないとするには、近すぎる場所。

「ご、ごめんなさい。その、スノードロップさんも、私と同じだったんですね。それなのに、嫌な女だなんて思っていました」

同じく姉の恋人に思いを寄せてしまった少女から。

「僕とシギユンは、これからどうなるかわからないけど、君は、できることならみんなが幸せになれる終わり方を迎えられるといいね」

姉妹との三角関係に巻き込まれ青年から。

ソフィアの服を握る手に、力がこもる。

「どこからですか……？」

続いて、声に力がこもる。

「どこから聞いてました！？」

シギユンは口元に手を当て、如何にも考えを巡らせているといった雰囲気を作る。それから、思いついたことを示して、分かりや

すく手を叩いた。

「ソフィアさんの、どうしても顔を合わせてくれないんだね、あたりからです!」

あなたのことはすべて丸ごと聞いています。衝撃の告白を聞かされたスノードロップは、瞳に涙を溜、唇を震わせて、うわ〜んという分かりやすい泣き声を出しながら走り去ってしまった。

「悪いこと、してしまいました……」

残されたシギユンは罰が悪そうにつぶやいた。

「あの子、とても人見知りが激しくて、よほど慣れた人じゃないと緊張のあまりすぐ表情が固くなるのよ」

「そのせいで外じゃいつも不愛想だとか冷たいって誤解されるんだよね。本当はあんなに可愛いのに」

姫様を守る六人の側近の中では最年少のスノードロップのことを妹のように持っている二人の姉は、柔らかな笑みを浮かべて逃走する妹の背を見送っていた。

その姿が見えなくなったところで、ジェイナスとシギユン、二人の密猟者へと体を向ける。

「さて、今度はあなたたちのお話をしましょうか。あなたたちは、ギルドの言いつけを破り、立ち入り禁止区画に侵入しました。また、許可されていない狩猟は重罪です」

途端に厳格さを取り戻すフィロソフィアに、ジェイナスはかしこまった様子で頷く。

「わかっています」

慣れから、つい格式張った悪い緊張感を出してしまったと、フィロソフィアは苦笑しながらも敢えて微笑んでみせる。

「でも、妹たちを助けてくれたことには感謝しています。だからこうしませんか？ あなた方は私たちの現地での協力者。だから峡谷にも入ったし、狩りも調査のため」

「でも……」

「順番の前後くらい誤魔化すよ。ただ、君たちは機密に触れすぎてしまった。もちろん現段階では口外して欲しくないし、できることなら、僕たちの一員になってもらいたい」

はじめからジェイナスとシギユンは調査協力のために峡谷に入った。そこで狩りを行ったのは確かにギルドの管轄外の出来事とはいえ、ギルドと協力関係にある王国の命令であれば、罪に問われることはない。

そして、それにはもう一つの意味。機密保持の意味合いもあった。

「君たち、古龍観測隊に入らないかい？」

ソフィアの提案に、二人はすぐには首を縦に振ろうとしない。

「拒否するなら、やっぱりギルド法で裁かなければならないわ。も

「ちろん、それなりの弁護はさせてもらうつもりだけど」

脅迫ではない。そのことは理解してもらえらるだろうか。しかし、ジェイナスが悩んでいるのは、賞罰のことではなかった。

「教えてください。古龍は、また、人里に現れますか？」

「古龍の目撃例は極端に少ないわ。ミスカトニツク王国でさえ、ここ五〇年で、目撃例は二〇を辛うじて超える数しか把握してない」

あまりに希少な存在。それが古龍。しかし、これがジェイナスの不安を払拭してくる事実になることは決してない。

「でも、その半数以上がここ一〇年に集中しているんだ」

比例級数的に目撃情報が増えている。さて、ここから導き出される数式はどんなグラフを描くだろうか。

「そして、古龍が絡むと絡まざるとに関わらず、異変が続発している。それを、ミスカトニツク王国は、セントポーリア様は古龍の動向と関連づけようとしている」

得体のしれない何かが起きている。そもそも、峡谷に霧が発生した事例は知られていない。では、ソフィアたちを結果的に救ったあの霧は、一体何だったのだろうか。また、スノードロップが峡谷調査に派遣されたきっかけは、遠く離れた樹海で助燃性の霧が発生したことであった。

まるでばらばらであったパズルの欠片が、古龍という存在で結びつけられようとしている。

そう、セントポーリア王女は考えているのである。

古龍と人との遭遇は、これから必ず発生する。

このことが伝わると、ジェイナスの心は決まったようであった。その瞳は気恥ずかしくなるほど、真っ直ぐなものである。

「わかりました。こちらからもお願いします。古龍と、いえ、もうこれ以上殺されてしまう人を少しでも減らすために戦わせてください」

その首には、響狼オルガロムのものとおぼしきいびつな爪と牙が飾られていた。

「ようこそ、王立古龍観測隊へ」

ソフィアの差し出した手を、ジェイナスはしっかりと握んだ。

「じゃあ、新たな仲間の誕生を祝して、せっかくだからみてもらいましょう」

フィロソフィアが再び、壁画の描かれた図面を広げる。しかし、そんなものに何も意味はなかった。ジェイナスもシギユンも、すでに目の前に確かに存在する壁画に目を奪われていたからだ。

諦めた様子で図面を畳みながら、フィロソフィアは手を伸ばす。

巨大な壁画。それは、古龍との戦いが始まる前にジェイナスたちに紹介していたものであった。ただし、あの時とは状況が違ってい

る。

古龍は辺り構わず気弾を放った。その結果、遺跡は破壊され、崖は崩れ、遺物の多くは失われてしまった。その中には貴重なものもあれば、まったく価値のないものも含まれている。

壁画を塞いでいた巨大な岩は後者に所属する。人の手では取り除くことができないとされていた岩を、古龍はこともなげに砕いたのである。

そして、明らかになる壁画の姿。

「風翔龍クシャルダオラに、右のは炎王龍テオ・テスカトル。そして、真ん中に描かれているのがハイパーボリアのお城」

セクメーア砂漠のハイパーボリアの遺跡で発見されたものとまったく同じものである。しかし、ハイパーボリアの方では中心部に大きな剥離が見られ、目の前の壁画は岩に守られていなかった左右の劣化が著しい。

クシャルダオラも、テオ・テスカトルもほとんどかすれてしまい、その輪郭しか見えていない。

ところが、中央部はほぼ無傷の状態の壁画が残されている。

「ここにこの壁画があった以上、ムーとハイパーボリアの関係は、もはや疑う余地はないでしょうね」

「そして、ハイパーボリアが古龍によって滅ぼされたこともね」

「これも、古龍、何ですか……」

「これが、僕たちの敵……」

「いいえ、この時代に生きる生きとし生けるものすべての敵よ」

壁画の中央。そこには大きな城が描かれている。そして、その上部には、赤い雲の中から突き出るようにその体軀をさらす巨大な龍の姿があった。

城ほどもある大きさに描かれ、強調されたその爪の鋭さ、顔の恐ろしさは人々の恐怖と恐れを示している。四肢がありながら、その背には翼のような突起が見られ、顔から伸びるたくましく不揃いな3本の角がまがましいとさえ言ってしまう気配を、こんな岩の上に並べられた染料を通してさえ伝えていた。

これこそがミスカトニツク王国第二王女が追いつけている存在。

これこそが古龍。

そして、これこそが、世界を幾度となく脅かしてきた始源にして異端の存在。

雨はやんで嵐は去った。抜かるんだ地面にはまだところどころ水たまりが残され、太陽の光をまぶしく反射している。

ジェイナスは砕けた岩の一つを腰掛けにして座っていた。まだ、気持ちの整理というものがまるでついていなかった。

突然恋人を失って、仇を探していたらそれは世界を揺るがしかねない問題に繋がっていた。

自分には荷が重いのではないだろうか。シギユンも同じ気持ちなのだろう。先ほどこから、立ったまま、話が続かない。

水たまりを小気味よく響かせて訪れたソフィアは朗らかに手を振った。まず、古龍観測隊への参加を表明してくれたことへの感謝を表明すると、その顔はいたずらっぽく笑う。

「でも、もう、仇討ちはいいの？」

「別にドラギュロスを殺したところで、ヘスティアが帰ってきてくれるわけじゃない。それに、僕のしていたことは、復讐でさえなかったから」

口ずさみながら、それはまるで自分に言い聞かせているようでもある。

ヘスティアが死んだのは世界に起きている異変の一つに巻き込まれたからであり、ドラギュロスがいたからではない。

原因と結果の話だ。復讐をあくまでも予防処置でしかないと捉えるのならば、結果ではなく原因を取り除かなければならない。それは、ドラギュロスでは、投げられた石ではない。

その石を投げた存在。この異変そのものであるということになる。

「僕は、死ななくてもいい人のために戦うよ。きっとそれが、僕の

復讐になる、はずだから」

この異変で生じる人的被害を少しでも少なくすること。ヘステイアのためにしてはあげられなかった、それでも、ヘステイアを助けるという代償行為になるだろうから。

「いい男だね、君は。姉妹が手玉にとられたのもわかるよ」

「ソ、ソフィアさん！」

笑う二人と顔を真つ赤にして怒る一人。

そんな時ふと、影が落ちた。水たまりに写るのはドラギュロスの姿。間違いない。ともに戦ったドラギュロスである。ジェイナスの手で翼に巻かれた包帯が、今にも剥がれかかっていた。

見上げると、日光がまぶしく目に飛び込んできた。光の中を、冥雷竜ドラギュロスは翼を大きく広げ、鉤爪を優雅にしながら飛んでいる。

その姿は灰色の甲殻を白く際だたせ、美しくさえあった。

「ベルキュロスがこんなに綺麗に見えたのは、初めてだ」

嵐は去り、雲一つない空から注ぐ太陽が、ジェイナスの心に彩りを添えているのだから。

後書き

これで三作目になるモンスターハンター短編もこれで終わりです。元々は、二作目、樹海に行っておきながら棘竜エスピナスも出さなければ、迅竜ナルガクルガも出さないという体たらくに、やはり三作目くらいはがちがちのバトルを取り入れたいと意気込んだ作品でした。

活動報告で、多分誰も反応してくれないだろうなとは思いつつも、試しにどんなモンスターがいいかと聞いたみたところ、幸運にも付き合ってくださる方に恵まれました。

当初は沼地か峡谷で悩んでいましたが、その方の意見を私が勝手にかみ砕いて採用したところ、峡谷とベルキュロスになった訳です。また、ご意見では、モンスターの乱入による乱戦をご希望されていました。

そこで、私のひねくれ根性が頭を出しました。

多くの人にとって、狩猟中にほかの大型モンスターが乱入した場合、想定するのは三つ巴の戦いか、でなければ人間対モンスター二頭を想定されるものと思います。

ここで、敢えて人間＋モンスターV・S・モンスターという図式に挑戦してみました。

きつと、誰もこんなことは想定していなかっただろうと、勝手に想像しています。

ただ、ベルキュロスを登場させることまでは決まっていたましたが、モンスター同士の争いというものがなかなか浮かびませんでした。

モンスターとは言え、その行動は実在の動物の行動に則したものとしてこのモンスターハンターを書いてきた私としては、同種が争うという図式はなかなか採用できません。縄張り争いや、雌を巡る争いが激化することはあるかもしれませんが、それが死闘にまで発

展するというのはいささか不自然。また、アプトノスなどの草食種がいる中、大型の捕食者が他の捕食者を襲うメリットはまずありません。

一応、私の短編では、環境に異変が起きているという設定を通してきましたが、草食種が極端に減ってしまったという設定を採用してしまうと、捕食者が人里近くにまで降りてきてしまう恐れがあるため、事態の收拾がつけられなくなってしまいます。それこそ、組織だった環境調査と対策、さらに被害復興と、することが多く、短編には馴染みません。

また、そろそろ古龍を登場させたいという意図もありました。そこでも思いついたのは、古龍がベルキュロスを捕食しているという設定でした。大型の捕食者が他の大型の捕食者を捕食しているという、敢えて自分が否定したことに取り組んでみたかったです。

古龍は、モンスターハンターの世界観にそぐわないと反対される方もいると聞きます。実際、私も生物としてあまりに異質で、こんな生物を登場させる以上は何かしつかりとした理由付けをしてもらいたいと常々考えていました。

その結果、古龍の人間じみた行動や、得意な能力、また生物の常識からかけ離れた捕食のあり方などを取り込んでみることにしました。古龍が異質な存在なら、そのことを強調することで以上さを肯定しようと試みたのです。

そうして、古龍クシャルダオラがベルキュロスを捕食しているという図式が成立したのです。

ただ、問題があります。古龍が使う龍属性です。

古龍が使う龍属性、これはどのようなものであるのか、私は知りません。火でも水でも雷でも氷でもない何か。

それをこちらで独自に設定し、腐食性の毒ということにしました。また、古龍の性能を全体的に引き上げたことに繋がり、龍毒の性能も上げられています。

この独自設定の説明をうまく演出の中に取り組む設定として、ド

ラギュロスが、天敵である古龍に対抗するために生まれてきたという設定が誕生しました。

進化論を利用したちよつとしたお遊びですが、個人的には龍毒と絡めてうまくまとめることができたのではないかと。

その反面、キャラクターの作り込みが甘い気がします。

設定のことばかりにかまけて、ストーリー面がやや単調になったのではないかと。

おまけに、あくまでも短編でありながら、続編としての体裁もあるため、妙に伏線が多い。

古代文明など、その最たる例です。私自身、モンスターハンターを短編として描くべきなのか、それとも繋がりのある世界観で、一連の事件として描くべきなのかについて悩んでいた時期があり、そのため、右往左往しています。

結局、五部作の続きものとして機能しているわけですが、まとめの章となる五作目では、これまでの四作品を読んでいなくとも楽しめるような作りで、かつ、四作品を知っていた方がより世界観を楽しめるような作品にしようとしています。

よって、次の四作目で、準備はすべて終わります。

フロンティア中心の方には馴染みが薄いかもしれませんが、トライ・ユーザーの方ならわかっていただけるでしょう。

凍土を舞台に、今度はミスリードなんて張ることなしに一直線のストーリー……、なんて私に書けるでしょうか。

ともかく、次も古龍が登場します。まあ、凍土に登場する古龍なんていないので、やはり捏造設定です。トライのモンスターでは、もちろんありません。

連投はさせません。これでだいぶ絞れてきましたね。

ジエン・モーラン、ナバルデウス、アルバトリオンではなくて、クシャルダオラでもない。

残りはテオ・テスカトル、ナナ・テスカトリ、オオナズチ、ヤマ

ツカミ、ミラボラスにミラバルカン、ミラルート、キリン。

さて、どれでしょう。正解しても景品はありません。

性能五割、六割増しは当たり前。タイトルは、「本当は怖い古龍童話」、ではもちろんありません。

なお、皆さん、本当に感想、気楽に書いてもらってもいいですよ。まあ、分母がそもそも小さいので、そんなボランティア精神に溢れた方にそうそう巡り会えないのも、仕方のないこととは思いますが、どう。

では、第四作目、「赤眼の王女、凍土を奏でる」でお会いしましょう。

最後にわかる人にしかわらない余談です。

スノードロップ、別名をガランサスと言っそうです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4942n/>

MONSTER HUNTER第三章～孤高の射手、峡谷を穿つ～

2011年3月23日12時12分発行